

●文 學

二〇〇六年および二〇〇七年の學界展望「文學」分野は、東北大學大學院文學研究科中國語學中國文學研究室が擔當する。二〇〇四年・二〇〇五年文學部門擔當の大東文化大學からは、調査すべき雑誌目録の貴重なデータベースを賜りました。心から御禮を申しあげます。目録部分については、花登正宏教授をはじめ、研究室の院生・學生諸氏の協力を得た。とくに論文の探索については、本研究室三年生の荒川里奈、喜岐廣美、關場美紀、土田かおり、薪鹽悠の五氏が手分けして基礎作業に当たり、そのうち、大山岩根研究助手（短期教務補佐員）と大學院生の佐藤由美氏、研究生の西條由子氏が整理と補充を加えた。研究室諸氏の献身的な協力に、記して感謝したい。

目録作成の基準は、出版委員會で定められた方式に従った。おおよそ以下の通りである。

一、目録の掲載は、會員からのメールによる「自己申告」を基本とし、擔當者が調査の及ぶ範囲で補充する。

二、収録の範囲は、二〇〇六年一月から十二月までに、日本國內で發行されたものとする。

三、分類は、まず大きく單行本と論文とに分け、さらにそれぞれを従来の十二分類に分ける。内容的に複数の分類に入るものは、それぞれに重複して収録する。

四、各分野の配列順は、基本的に、著者・編者・譯者等の氏名の五十音順とする。

五、分類の最後の「十三、補遺」は、二に記した期間以前の文献で、前年までの「學界展望（文學）」に收められなかったものである。會員から申し出のあった場合に、収録している。電子メールで自己申告をお寄せ下さった會員各位に、心から御禮申しあげます。ただ、その数が三十名に満たなかったことには、寂寞を禁じ得ませんでした。次回には多くの方がお寄せ下さることを願うばかりです。

目録作成に当たっては、時間的かつ人的制約により、なお遺漏や校正ミスが多く含まれていることと、お気づきの点を、ご批評いただければ幸いです。なお、本目録では、上記の収録基準の範囲内ないと判断される場合は、収録を敢えて控えさせていただきます。なにとぞ御諒解賜りますようお願い申し上げます。

單行本

一、總記

石川 忠久 漢詩の魅力
石川 忠久 新漢詩の世界 (CD付)
石川 忠久 新漢詩の風景 (CD付)

學界展望(文學) (二〇〇六年一月~十二月)

石川 忠久	漢詩の魅力	筑摩書房	一海 知義	漢詩逍遙	藤原書店
石川 忠久	新漢詩の世界 (CD付)	大修館	一海 知義	漢語いろいろ	岩波書店
石川 忠久	新漢詩の風景 (CD付)	大修館	今村與志雄	橋川時雄の詩文と追憶	汲古書院
			編 海江田萬里	海江田萬里の音讀したい漢詩・漢文傑作選 (CD付)	小學館
			河田 聰美	知識ゼロからの中國名言・名詩	幻冬舎
			刊行會 編	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集	研文出版
			駒田 信二	漢詩百選 人生の哀歡	筑摩書房
			鹽見 邦彦	中國の「紀年」詩	白帝社
			竹内實編著	岩波漢詩紀行辭典	岩波書店
			張 競	アジアを讀む	みすず書房
			鄭 雲	知恵とユーモア―中國笑話集	新風舎
			中嶋 隆藏	中國の文人像	研文出版
			松下 綠	漢詩に遊ぶ	集英社
			八木 章好	心を癒す「漢詩」の味わい	講談社
			安岡 正篤	漢詩と人間學―照心詩話	福村出版
			吉川幸次郎	漢文の話	筑摩書房
			吉崎 一衛	漢詩の旅1 西安	明治書院
			吉崎 一衛	漢詩の旅2 シルクロード	明治書院

吉崎 一衛 漢詩の旅4 長江 明治書院

二、先 秦

加納 喜光 詩經I 戀愛詩と動植物のシンボリズム 汲古書院

加納 喜光 詩經II 古代歌謠における愛の表現方法 汲古書院

小南 一郎 古代中國 天命と青銅器 京都大學學術出版會

徐 送迎 東アジア文化圏と詩經 明治書院

牧角 悦子 中國古代の祭祀と文學 創文社

松田 稔 『山海經』の基礎的研究 笠間書院

松田 稔 『山海經』の比較的研究 笠間書院

無名史 詩經—國風 新風舎

三、漢魏晉南北朝

安藤信廣 陶淵明—詩と酒と 東方書店

大上正美編 田園 東方書店

堀池信夫 史記5 徳間書店

大石 智良 史記5 徳間書店

久米 旺生 史記8 『史記』小事典 徳間書店

横膳宏監修 齊藤 希史 嘉靖本古詩紀 第3卷(北魏、隋) 汲古書院

佐野 誠子 搜神記・幽明録・異苑他 明治書院

竹田 晃 世説新語 明治書院

黒田眞美子 世説新語 明治書院

西野廣祥譯 史記7 徳間書店

村山孚 譯 史記6 徳間書店

森野 繁夫 庚子山詩集 白帝社

和田 武司 史記4 徳間書店

四、隋唐五代

今村與志雄 唐宋傳奇集(上) 岩波書店

今村與志雄 唐宋傳奇集(下) 岩波書店

編譯 唐詩研究 汲古書院

岡村 繁 白氏文集8 明治書院

興膳宏監修 嘉靖本古詩紀 第3卷(北魏、隋) 汲古書院

横山 希弘 史記5 徳間書店

後藤 秋正 唐代の哀傷文學 研文出版

下定 雅弘 白樂天の愉悅—生きる叡智の輝き 勉誠出版

竹田 眞美子 枕中記・李娃傳・鴛鴦傳他 明治書院

松本 肇 唐代文學の視點 研文出版

米山寅太郎 李太白文集—等解題 汲古書院

五、宋

寛 文生 四庫提要南宋五十年研究 汲古書院

野村 鮎子 宋詞研究 南宋篇 創文社

村上 哲見 宋詩概説 岩波書店

吉川幸次郎 宋詩概説 岩波書店

六、金・元・明

大木 康 原文で楽しむ明清文人の小品世界 集廣舎

大阪大學 成化本『白兔記』の研究 汲古書院

究室編 明代の遊郭事情 汲古書院

小川 陽一 風月機關 汲古書院

合山 究 明清時代の女性と文學 汲古書院

駒田信二譯 水滸傳 7 筑摩書房
 駒田信二譯 水滸傳 8 筑摩書房
 蜀士 玄子 三國志游學記 新風舎
 立間祥介譯 三國志演義 (改訂新版) 1 徳間書店
 立間祥介譯 三國志演義 (改訂新版) 2 徳間書店
 立間祥介譯 三國志演義 (改訂新版) 3 徳間書店
 立間祥介譯 三國志演義 (改訂新版) 4 徳間書店
 田仲 一成 中國地方戲曲研究―元明南戲の東南沿海地區への傳播 汲古書院
 寺尾 善雄 一冊で讀む! 三國志 ぶんか社
 寺尾善雄譯 水滸後傳 秀英書房
 中川諭監修 30分でわかる三國志 日本文藝社
 古田 敬一 拍案驚奇譯注 2―不倫夫婦の因果應報 汲古書院
 滿田 剛 三國志 正史と小説の狭間 白帝社
 宮 紀子 モンゴル時代の出版文化 名古屋大學出版會
 村上知行譯 ザ・金瓶梅 愛蔵版 第三書館
 吉川幸次郎 元明詩概説 岩波書店

七、清

青木 正兒 隨園食單 岩波書店
 譯注
 大木 康 原文で楽しむ明清文人の小品世界 集廣舎
 合山 究 明清時代の女性と文學 汲古書院
 駒田信二譯 花のしとね 北溟社
 閑ふさ子 鹽森由岐子 幌馬車の歌 草風館
 譯 藍博洲 著
 岡部敦子 陸小鳳傳奇 1 早稲田出版
 岡崎由美譯 金鵬王朝
 古龍 著 陸小鳳傳奇 2 早稲田出版
 岡崎由美譯 繡花大盜
 池上貞子譯 荒人手記 (新しい臺灣の文學) 國書刊行會
 朱天文 著 臺灣の文學
 石井美恵子 同時代の中國文學 東方書店
 金屋修監修 ミステリー・イン・チャイナ
 宇野木 洋 克服・拮抗・模索―文革後中國の文學理論領域 世界思想社

八、近現代

岡崎由美 神鵬劍俠 1 徳間書店
 松田京子譯 忘れがたみ
 金庸 著 神鵬劍俠 2 徳間書店
 松田京子譯 モンゴルの野望
 金庸 著 神鵬劍俠 3 徳間書店
 岡崎由美 襄陽城の攻防
 金庸 著 神鵬劍俠 4 徳間書店
 松田京子譯 永遠の契り
 金庸 著 神鵬劍俠 5 徳間書店
 岡崎由美 神鵬劍俠 5 徳間書店
 松田京子譯 めぐり逢い
 金庸 著 神鵬劍俠 5 徳間書店
 尾崎文昭編 「規範」からの離脱―中國同時代作家たちの探索 山川出版社
 北岡 正子 魯迅 救亡の夢のゆくえ―惡魔派詩人論から「狂人日記」まで 關西大學出版部
 桑島道夫 現代中國文學短編選 鼎書房
 原善 編 雲上の少女 文藝春秋
 夏伊 著 雲上の少女 文藝春秋
 白水紀子譯 めしべのない花―中國初の性轉換者 新風舎
 林 著 莎莎の物語
 沈從文「蕭蕭」―「阿金」―「牛」の版本研究 サッポロ堂書店
 城谷武男編 魯迅を讀み解く―謎と不思議の小説 10篇 東京大學出版會
 角田篤信編
 代田 智明

竹内好著 竹内好セレクションⅠ―日本への／からのまなざし 日本經濟評論社
 丸川哲史編 竹内好セレクションⅡ―アジアへの／からのまなざし 日本經濟評論社
 鈴木將久編 漢譯ホームズ論集 汲古書院
 樽本 照雄 何たって高三！―僕らの中國受験戦争 日本僑報社
 千葉 明譯 摩子（新しい臺灣の文學） 國書刊行會
 陳正靛譯 陸小鳳傳奇³ 早稻田出版
 白先勇著 決戰前後 早稻田出版
 岡崎由美譯 乞食の子 小學館
 土屋文子譯 中國の兒童文學 久山社
 納村公子譯 魯迅探索 汲古書院
 賴東進著 深淵―嵇玄詩集（臺灣現代詩人シリーズ²） 思潮社
 松浦 恆雄 臺灣文學のおもしろさ 研文出版
 松永 正義 暗幕の形象―陳千武詩集（臺灣現代詩人シリーズ¹） 思潮社
 三木 直大 越えられない歴史―林亨泰詩集（臺灣現代詩人シリーズ³） 思潮社
 三木 直大 現代詩人シリーズ 思潮社

九、民間文學・習俗

山本武利編 「帝國」日本の學知⁵ 東アジアの文學・言語空間 岩波書店
 藤井省三編 吉田富夫譯 四十一炮（上）（下） 中央公論新社
 莫言著 吉田良子譯 女帝 わが名は則天武后 草思社
 山嵐著 有澤 晶子 中國傳統演劇様式の研究 研文出版
 紙村 徹 神々の物語―神話・傳説・昔話集（臺灣原住民族文學選⁵） 草風館
 志村 五郎 中國說話文學とその背景 筑摩書房
 孫大川 等 原住民族文化・文學言説集¹（臺灣原住民族文學選⁸） 草風館
 話梅子編譯 游仙枕―中國昔話大集 アルファポリス
 渡邊 明次 梁山伯祝英臺傳説の眞實性を追う（日中對譯版） 日本僑報社
 渡邊明次譯 趙清閣著 小説 梁山伯と祝英臺（日中對譯版） 日本僑報社

十、日本漢文學

十一、比較文學

加藤 國安 漢詩人子規―俳句開眼の土壤 研文出版
 京都大學文學研究室 京都大學藏實隆自筆 和漢聯句譯注 臨川書店
 究室編 長澤規矩也 和刻本漢籍分類目錄 增補補正版 汲古書院
 林田慎之助 漢詩のこころ 日 講談社
 本名作選

十二、書誌

王 岩 與謝蕪村の日中比較文學研究 和泉書院
 高島 俊男 水滸傳と日本人 筑摩書房
 木田 章義 兩足院―學問と外交の軌跡― 京都大學大學院文學研究科國語學國文學研究室

論 文

一、總 記

伊藤ひろみ	中國古代文化常識 圖典 樂律	愛知論叢 81	孫昌武	關於古典詩歌的詩語	松浦友久博士追悼紀念中國古典文學論集	石本道明	楚辭「天問」整序研究管窺	國學院雜誌 107
今村與志雄	『中國古典小說選』(明治書院)にふれて	週刊讀書人 2643	竹内實	漢詩とのあい「中國小説史上の標識となる竹内」	「中國古典小説選」全12卷／竹田晃・黒田眞美子編纂(明治書院)の刊行について	小澤賢二	汲冢竹書再考(上)―先秦漢魏晉期の詩歌辭賦作品に見える芳香と女性の表現について	中國研究集刊 42
植木久行	正確な讀解と綿密な調査の「基本」を求む―竹内實編著『岩波漢詩紀行辭典』論評	中國詩文論叢 25	竹田晃	「中國古典の怪異譚、傳奇、純愛、笑話の魅力」	「週刊讀書人」2631	狩野雄	香りを含む女たち(上)―先秦漢魏晉期の詩歌辭賦作品に見える芳香と女性の表現について	東北大學中國語學文學論集 11
内山精也	上海にて中國古典研究と漢文教育の將來を考える	早稲田大學人文論集 45	福原義春	「中國古典の怪異譚、傳奇、純愛、笑話の魅力」	「週刊讀書人」2643	鈴木健之	風馬牛考	松浦友久博士追悼紀念中國古典文學論集
汪涌豪	論「圓」的形式意味―中國古代形式批評理論論記	中國文學論集 35	竹林家正雀	「竹田晃・黒田眞美子編『中國古典小説選』12卷(明治書院)刊行を機に	未名 24	田島花野	招魂儀禮の空間と時間―『楚辭』「招魂篇」の亂辭を中心	集刊東洋學 96
甲斐勝二	陳書良・潘沅汶著『中國商業文學發展論』翻譯、商業文學の提唱を巡って／中國語文教學の周邊	福岡大學人文論叢 37・4	藤原克己	書評 興膳宏著『古代漢詩選』	中國研究月報 60	田中和夫	詩歌の言語表現における雅俗觀―「詩經」『蕭蕭馬鳴』をめぐって	松浦友久博士追悼紀念中國古典文學論集
葛曉音	從詩歌本文中探求創作原理―松浦友久教授的中國詩型研究	松浦友久博士追悼紀念中國古典文學論集	松岡榮志	漢詩王國の大長征―岩波漢詩紀行辭典	中國研究月報 60	中島敏夫	金城攷―『尚書』(禹貢)孔傳「金城」に「偽の鐵證」ありや否やを論ず	松浦友久博士追悼紀念中國古典文學論集
沓掛良彦	書評・宇野直人著『漢詩の歴史―古代歌謠から清末革命詩まで』	週刊讀書人 2629	山寺三知譯	中國古代音樂史學概論(3)	國學院短期大學紀要 23	間嶋潤一	『尚書中候』の受命神話―皋陶・秦穆公の場合―	香川大學國文研究 31
古田島洋介	詩魂豊かな漢詩の通史 書評 宇野直人著『漢詩の歴史』	東方 302	鄭祖襄著	中國古代音樂史學概論(3)	紀要 23	村山敬三	「塞翁馬」教材研究―新しい漢字漢文教育 42	神奈川大學大學院言語と文化論集 12
			石川三佐男	蟬螭紋精白鏡の銘文と楚辭	東方宗教 108	劉渴水	『詩經』から見た色彩語	

三、漢魏晉南北朝

安藤 信廣	庾信「擬連珠」表 現と論理	64	漢文學學會會報	狩野 雄	香りを含む女たち (上)―先秦漢魏 晉期の詩歌辭賦作 品に見える芳香と 女性の表現につい て	東北大學中國語 學文學論集11	鈴木 崇義	張衡「歸田賦」小 考	國學院中國學會 報51
井口 博文	「項羽本紀」につ いて	悼浦友久博士追 悼記念中國古 典文學論集	中國語中國文化	鎌田 崇嗣	梁簡文帝における 放蕩と美	筑波中國文化論 叢25	住谷 孝之	「詩品」陶淵明評 における「世歎其 質直」の解釋につ いて	松浦友久博士追 悼記念中國古 典文學論集
池間理代子	吳歌の繼承―「四 季歌」を中心に―	3	中國詩文論叢25	釜谷 武志	書評 門脇廣文著 『文心雕龍の研究』	未名24	搜神後記研 究會	搜神後記譯注(六)	中國中世文學研 究50
井上 一之	陶淵明「詠三良詩」 について―忠と濟 民―	中國詩文論叢25	日中言語文化4	龜山 朗	『史記』「荊軻傳」 と『燕丹子』(上)	滋賀大國文44	鷹橋 明久	青少年期の阮籍	中國中世文學研 究50
植田 渥雄	漢代樂府の話―戀 歌二題をめぐって	4	日中言語文化4	君島 淳	『史記』「張釋之馮 唐列傳」の構成に ついて	名古屋大學中國 語學文學論集18	高橋庸一郎	樂府詩の特徴と樂 府の廢止	阪南論集42―1
大橋 由治	『世說新語』と魏 晉文化―説話に見 る人物評價の實相―	大東文化大學漢 學會誌45	興膳 宏	小鳥の飛翔―阮籍・ 張華から郭象へ―	松浦友久博士追 悼記念中國古 典文學論集	丁 國旗	陶淵明の「虛」と 「實」―岡村繁氏 の「淵明觀」をめぐ って―	神戸女學院大學 論集52―3(通 卷154)	
大平 桂一	中國幻想建築コレ クション番外編	颯風40	河野美貴子	『搜神記』と中國 古代の傳説をめぐ る一考察	説話文學研究41	戸倉 英美	漢鏡歌「戰場南」 に關する一考察	松浦友久博士追 悼記念中國古 典文學論集	
大村 和人	「兄弟」の歸宅と 私宴―樂府「相逢 行」―「長安有狹邪 行」の「三子」を めぐって―	中國―社會と文 化21	齋藤 茂	陳尚君輯『全唐文 補編』―舊五代史 新修會證―	中國學志21	富永 一登	魯迅輯「古小說鈞 沈」校釋―「幽 明錄」(八)―	中國學研究論集 16	
小川 恆男	六朝樂府譯注(四) ―「君馬黃」(上) 一首―	17	中國學研究論集	佐伯 雅宣	樂府「釣竿」考	富永 一登	魯迅輯「古小說鈞 沈」校釋―「幽 明錄」(九)―	中國學研究論集 17	
小川 恆男	六朝樂府解釋鑑賞 總覽(初稿)	中國古典文學研 究創刊號1	佐藤 正光	元嘉時代の謝莊	松浦友久博士追 悼記念中國古 典文學論集	中野 將	陸機「去去遺情累 安處撫清琴」の 意味するもの	北九州市立大學 外國語學部紀要 115	
角谷 恆男	六朝樂府解釋鑑賞 總覽(初稿)	中國古典文學研 究創刊號1	城山 陽宣	賈誼年譜長編序説 資料編年上の問題 點を中心に	關西大學中國文 學會紀要27	那須 智子	謝靈運は何故山水 を愛したのか―東 晉詩との比較か ら―	中國學研究論集 16	

許山 秀樹	詩語としての「悲」と「哀」―唐代までの詩の用例を中心に―	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集	森野 繁夫	庾信の詩―道士歩虚詞十首― 西魏における庾信― 三年囚於別館― の時期	中國中世文學研究 50	若林 建志	樹木の怪―「搜神記」の世界	中國學研究 24
原田 直枝	『文選』後の六朝文學のゆくえ…書評『越境する庾信』上・下	東方 300	森野 繁夫	庾信の詩 (十六)	中國學研究論集 16	和田 英信	建安文學をめぐって	三國志研究 1
福井 佳夫	六朝の遊戯文學 (下)―遊戯文學論 (十六)―	中京大學文學部 紀要 41	森野 繁夫	庾信の詩 (十七)	中國學研究論集 17	四、隋唐五代		
福井 佳夫	吳均の「檄江神貴周穆士靈」について―遊戯文學論 (十七)―	中京國文學 25	矢嶋美都子	書評 加藤國安著『越境する庾信―その軌跡と詩的表象―』	集刊東洋學 96	赤井 益久	愚かなる川―柳宗元の詩における山水 (中)―	河川レビュー 133
福井 佳夫	六朝の即興創作に關する一考察	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集	矢田 博士	曹植の「七哀」と晉樂所奏の「怨詩行」について―不可解な二箇所の改變を中心―	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集	赤井 益久	柳州に生きる―柳宗元の詩における山水下―	河川レビュー 134
古澤 惇子	六朝における陶詩受容の一端について	青山語文 36	矢田 博士	魏における五言詩流行の要因について	中國詩文論叢 25	赤井 益久	曲江の春―唐代における水のある風景―	河川レビュー 135
増野 弘幸	陶淵明における「夕暮れの山」の表現についての一試論	漢文學學會會報 64	山口 爲廣	曹植における樂府	新しい漢字漢文教育 43	赤井 益久	唐釋皎然の詩論について―中國詩學「景情交融」の主題に即して―	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集
松浦 史子	崑崙と水―郭璞「山海經圖讚」―崑崙丘―にみる水の宇宙―	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集	吉田 文子	吳聲西曲における雙關語の構造・比喻表現との比較において	お茶の水女子大學中國文學會報 25	市川 桃子	書評 『李商隱研究』 (詹濁江著)	新しい漢字漢文教育 43
松尾 肇子	古典に見る漢族女性の形像―王昭君考―	中國 21 25	吉原 英夫	項羽本紀を讀む (上)	札幌國語教育研究 12	市川 桃子	蓮花の中の李白―詩語による表現分析―	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集
森野 繁夫	庾信「哀江南賦」譯注	中國古典文學研究 創刊號 1	李 正榮	「序志」から見る『文心雕龍』のロジック	京都外國語大學研究論叢 68	市原 里美	杜甫の詩における「生理」	中國中世文學研究 49

植木 久行 「杜牧詩選」補注 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

植木 久行 未知の領域に挑んだ畢生の勞作書評 高木重俊著 『初唐文學論』 東方301

上野 裕人 唐詩における曹植・不詩の影響について 孟浩然・王昌齡・柳宗元・元稹を中心として 語文と教育20

内田 誠一 「蕭和尚靈塔銘」の碑文について 王維・王縉との交流を物語る石刻資料の復元 58 日本中國學會報

内田 誠一 王維の自閉的志向 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

内田 誠一 王維の乗如禪師に寄せた詩とその周邊(上) 中國詩文論叢25

埋田 重夫 白居易における松と竹 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

梅田 雅子 劉禹錫「竹枝詞」の特徴「杜甫」の「夔州歌十絶句」との比較から 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

遠藤 寛一 「長恨歌」の研究(下) 「開元天寶遺事」を中心として(上) 江戸川短期大學紀要21

大淵 貴之 唐創業期の「類書」概念―「藝文類聚」と「群書治要」を手がかりとして 中國文學論集35

大山 岩根 李商隱「四皓廟」詩について 東北大學中國語學文學論集11

大山 岩根 李商隱「北齊二首」について 集刊 東洋學95

岡田 曉宜 杜子春と精神分析―苦行のパラドクス― アジア遊學 別冊3

岡田 充博 「板橋三娘子」考(四)補訂 東洋古典學研究22

岡村 繁 李白の生い立ちと任侠・神仙 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

岡村真壽美 『白香山詩集』補遺卷に見える「南陽小將張彥瑛口鎖稅人場射虎歌」について 白居易研究年報7

岡本不二明 異類たちの饗宴―唐代傳奇「東陽夜怪録」を手がかりに 中國文史論叢2

岡本不二明 書評 張鴻助『敦煌俗文學研究』 中國文史論叢2

加藤 敏 元結「大唐中興頌」の解釋をめぐる 漢文學學會會報64

加藤 敏 孟浩然「春曉」―漢文教材としての可能性― 千葉大學教育學部研究紀要54

加藤 聰 類書「初學記」の編纂―その太宗御製偏重をてがかりとして― 東方學111

門脇 廣文 上海辭書出版社『唐詩鑑賞辭典』譯注稿―李商隱篇(13)― 大東文化大學紀要(人文科學)44

鎌田 出 宋玉の故宅―唐詩に見えろその位相― 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

川合 康三 廣廈千萬間―杜甫と白居易― 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

川合 康三 書評 『初唐文學論』(高木重俊著) 新しい漢字漢文教育42

小池 一郎 柳詩注譯(其二) 言語文化8―4

小池 一郎 柳詩注譯(其三) 言語文化9―1

小高 修司 白居易「風痺」攷 白居易研究年報7

紺野 達也 唐詩における「詩人」と「畫家」―王維詩を手がかりに― 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

齋藤 茂 韓孟聯句について―短編の作品を中心に― 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

坂口 三樹 「李徴」の變容―「人虎傳」本文の生成に關する覺書― 漢文學學會會報64

繁原 央 李白「秋浦歌」考 常葉國文29

静永 健 千載佳句所引耽漳詩異文考 中唐文學會報13

靜永	健	唐詩人の知的生き方に學ぶ『書評「百樂天の愉悅」』	東方307	詹	滿江	貧女詩考	松浦友久博士追悼記念『中國古典文學論集』	土谷	彰男	中唐初期における蘇州文壇形成についての一考察―文學理論の展開と五言古體詩について	松浦友久博士追悼記念『中國古典文學論集』
靜永	健	白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語	中國文學論集35	蘇	明明	唐代の喫茶文化史における詩僧皎然の茶詩	日本中國學會報58	土谷	彰男	韋應物「驪山行」詩考	中國文學論叢25
清水	凱夫	李善注における「三の問題點」	松浦友久博士追悼記念『中國古典文學論集』	傍島	史奈	詩禪間の矛盾と詩僧皎然にみえる解決―	中唐文學會報13	寺尾	剛	白雲色滿蒼梧―李白における「蒼梧」と「海」―	松浦友久博士追悼記念『中國古典文學論集』
下定	雅弘	白居易と魚釣り	松浦友久博士追悼記念『中國古典文學論集』	高橋	忠彦	釋皎然の茶詩	茶の湯文化學12	戸崎	哲彦	唐・元晦の詩に見える越亭について	島大言語文化20
下定	雅弘	白詩の衣服表現に見る「兼濟」と「獨善」―裘・「衣食」の衣・葛衣など―	白居易研究年報7	高橋	良行	李白の飲酒詩における酒量表現について―杜甫・白居易と比較しつつ―	松浦友久博士追悼記念『中國古典文學論集』	富永	一登	舊鈔無注本『文選』に見られる「臣君」について	松浦友久博士追悼記念『中國古典文學論集』
下定	雅弘	柳宗元詩における陶淵明の受容―「詠史」の詩をめぐって―	岡山大學文學部紀要45	田口	暢穗	白居易の單衣もの	松浦友久博士追悼記念『中國古典文學論集』	富永	一登	『文選』李善注の從省義例「已見」	中國古典文學研究創刊號1
岑參研究會		岑參文譯注―墓銘二篇―	中國文學論集42	田口	暢穗	白居易「香爐峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁」	新しい漢字漢文教育43	中尾	一茂	陳子昂「垂拱二年補闕論突厥表」	千里山文學論集75
陣内	孝文	王維の輞川莊「喜捨」と宦官李輔國の専横	中國文學論集35	橘	英範	劉白聯句譯注稿(6)	岡山大學文學部紀要45	中尾	一茂	陳子昂「垂拱二年補闕論突厥表」	千里山文學論集76
須藤健太郎		權徳輿の文學論と三教	松浦友久博士追悼記念『中國古典文學論集』	谷口	高志	白居易の詩歌における音樂描寫と「通感」―あるいは知覺をめぐる美意識の諸相について―	白居易研究年報7	中木	愛	白居易の音樂描寫の土壤―中唐までの音樂描寫について―	中國學研究論集17
妹尾	昌典	戎昱『早梅』詩と李羣玉『寄友』詩	成城國文學22	谷口	匡	蟲の傳記―柳宗元「蝸蟻の傳」を讀む	數研國語通信つれづれ8	中木	愛	白居易の音樂描寫における「音」の要素の盛り込み方―琵琶の描寫を中心として―	白居易研究年報7
詹	滿江	魚玄機の詩について	杏林大學外國語學部紀要18	チーム市川		詩人の個性―詩語による分析の試み	中唐文學會報13	中原	健二	「約心」ということ	中國言語文化研究6

二宮 俊博 津阪東陽『杜律詳解』譯注稿(六) 要5 椛山女學園大學文化情報學部紀

松尾 幸忠 池州における二つの詩跡―齊山と杏花村― 中國詩文論叢25

諸田 龍美 戀情の復権―「哀江頭」から「長恨歌」へ― 愛媛大學法文學部論集(人文科學編)20

許山 秀樹 詩語としての「悲」と「哀」―唐代までの詩の用例を中心に― 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

松原 朗 「杜甫嚴武反目説話」の消長 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

山島めぐみ 杜甫における「遊び」…「狂」の用例を中心に 漢文學學會報 64

長谷川 慎 文學研究中小説類史料價值的再認識―『法苑珠林』、『冥祥記』的研究― 文藝論叢66

松原 朗 杜甫の没落者を詠ずる詩―禮樂的秩序への追想― 中國詩文論叢25

山田 和夫 韋應物詩に見られる史隱表現―「幽」字の使われ方を中心に― 中國學研究論集 16

長谷部 剛 李白詩と「木蘭詩」―「木蘭詩」の形成と傳承― 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

松原 朗 死者を悼む文學―唐詩の豊穠な世界を窺う―斷面・書評『唐代の哀傷文學』 東方305

渡邊志津夫 韓愈の初期文章作品に見られる典故表現―『莊子』との關連を中心に― 中國中世文學研究 49

畑村 學 韓門文人の史家的性格について―李翱を中心に― 中國中世文學研究 50

松本 肇 賈島の文學 文藝言語研究・文藝篇49

渡部 英喜 王維「茱萸沂」詩譯注(一) 日本文學會誌 18

波戸岡 旭 白居易閑適詩について 國學院中國學會報51

丸山 茂 唐代詩人の食性―蟹・肉食・筍― 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

渡部れい子 李白「逸興」考 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

原田 直枝 「江南は瘴癘の地」そして故郷は―隋の孫萬壽の詩を手がかりとして― 中國文學報71

丸山 茂 「王維の自」意識(上) 中國語中國文化 3

渡部れい子 晩唐における李白受容について―詩人形成過程を中心に― 中國文學論叢25

福井 敏 唐代における詩人評價 新しい漢字漢文教育42

道坂 昭廣 書評 高木重俊著『初唐文學論』 中國文學報71

五、宋

古川 末喜 杜甫の詩に描かれた瀼西宅の位置について―白帝城東草堂河西― 中國文學會報13

三好 さら 白居易研究―漂泊感についての考察― 日本文學 102

五、宋

馬 曉地 唐人早朝 東北大學中國語學文學論集11

森 博行 白居易の詩―邵雍の「放言」詩について― 白居易研究年報 7

青木沙彌香 竹澤英輝 許山秀樹 松尾豐浩 矢野博士 譯注 『後山詩話』譯注稿(二) 言語と文化 愛知大學語學教育研究室紀要14(通卷41)

増子 和男 「再生の秘技」考―返魂香の來源をめぐって― 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

森瀨 壽三 李白「靜夜思」その後 關西大學中國文學會紀要27

松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

青木沙彌香	竹澤英輝	許山秀樹	三尾肇子	矢野博士	譯注	青山宏	淺見洋二	今場正美	尾崎裕	今場正美	尾崎裕	内山精也	宇野直人	王兆鵬著 池田智幸譯	大森信徳	小林義廣	小林義廣	小林義廣
〔翻譯〕陳師道著 『後山詩話』譯注 稿(一)	言語と文化 知大文學部教育 研究室紀要 (通巻42)	知大文學部教育 研究室紀要 (通巻42)	知大文學部教育 研究室紀要 (通巻42)	知大文學部教育 研究室紀要 (通巻42)	知大文學部教育 研究室紀要 (通巻42)	『花間集』作品の 解釋をめぐって	『焚棄』と『改定』 書評 寛文生・野 村鮎子著『四庫提 要南宋五十年研究』	『太平廣記』 夢部 譯注(一)	『太平廣記』 夢部 譯注(一)	『太平廣記』 夢部 譯注(一)	『太平廣記』 夢部 譯注(一)	宋代士大夫の詩歌 觀―蘇軾―白居易― 評の意味するもの	詩作活動から見た 朱子の陶淵明觀	宋詞の口頭による 傳播について―歌 妓の歌唱を中心と して―	蔡襄の書の周邊・ 歐陽脩との交友を めぐって	『琴堂論俗編』 譯 註稿(2)	『琴堂論俗編』 譯 註稿(3)	『琴堂論俗編』 譯 註稿(3)
施小煒	3	3	3	3	3	風絮2	東方307	學林43	學林44	學林44	學林44	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	風絮2	愛知淑徳大學論 集 文學部・文 學研究科篇31	東海大學紀要文 學部84	東海大學紀要文 學部85	
The Citation in Lyrics of Song Dynasty	中國語中國文化	中國語中國文化	中國語中國文化	中國語中國文化	中國語中國文化	宋詞研究會	太平廣記研 究會	太平廣記研 究會	太平廣記研 究會	太平廣記研 究會	太平廣記研 究會	「嶽陽樓記」中の 傳奇體について	「嶽陽樓記」中の 傳奇體について	「嶽陽樓記」中の 傳奇體について	范成大「桂海虞衡 志」第一篇「志巖 洞」の復元上・ 中國山水文學にお ける「巖洞遊記」 としての位置づけ	歌への志向と宋元 時代のジャンル論	「約心」というこ と	
龍榆生編選『唐宋 名家詞選』譯注稿 (二)	風絮2	風絮2	風絮2	風絮2	風絮2	龍榆生編選『唐宋 名家詞選』譯注稿 (二)	『太平廣記』卷二百 八十三「巫」附 「厭呪」―譯注	『太平廣記』卷二百 八十三「巫」附 「厭呪」―譯注	『太平廣記』卷二百 八十三「巫」附 「厭呪」―譯注	『太平廣記』卷二百 八十三「巫」附 「厭呪」―譯注	『太平廣記』卷二百 八十三「巫」附 「厭呪」―譯注	「長恨歌傳」と 「楊太真外傳」と の比較から見る― 宋代影戲とその特 色	「長恨歌傳」と 「楊太真外傳」と の比較から見る― 宋代影戲とその特 色	「長恨歌傳」と 「楊太真外傳」と の比較から見る― 宋代影戲とその特 色	范成大「桂海虞衡 志」第一篇「志巖 洞」の復元上・ 中國山水文學にお ける「巖洞遊記」 としての位置づけ	歌への志向と宋元 時代のジャンル論	「約心」というこ と	
東英壽	東英壽	東英壽	東英壽	東英壽	東英壽	歐陽脩『醉翁琴趣 外篇』の成立過程 について	北宋時代の書物に 見られる詩跡的觀 點について	北宋時代の書物に 見られる詩跡的觀 點について	北宋時代の書物に 見られる詩跡的觀 點について	北宋時代の書物に 見られる詩跡的觀 點について	北宋時代の書物に 見られる詩跡的觀 點について	歴代諸選本におけ る辛棄疾の詞	歴代諸選本におけ る辛棄疾の詞	歴代諸選本におけ る辛棄疾の詞	依り左藏吳傅正寺 丞に贈らるるに和 す」詩を中心に	司馬光・邵雍交遊 録(下の下)	大谷女子大國文	
風絮2	アジア遊學91	アジア遊學91	アジア遊學91	アジア遊學91	アジア遊學91	文學部論叢 本大學文學部 文學篇	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	松浦友久博士追 悼記念 中國古 典文學論集	

森 博行 白居易を批判した「放言」詩について

7 白居易研究年報

片倉 健博 「三國志演義」の目録について―福建系版本を糸口にして―

3 中國語中國文化

山口 謠司 宋代の「類書」と「資料集成」

大東文化大學漢學會誌45

土肥 克己 歌への志向と宋代のジャンル論

58 日本中國學會報

山口 若菜 蘇軾の「自新」の記録

筑波中國文化論叢25

長尾 直茂 朝鮮版「三國志演義」管見―「通俗三國志」との関連をめぐる試論

漢文學解釋與研究9

山口 若菜 蘇軾のいびきの詩について

58 日本中國學會報

中田 妙葉 「菊花の約」における「信義」について―中國白話小説「范巨卿鶏黍死生交」との関係による一考察―

高崎經濟大學論集48―4

六、金・元・明

荒木 猛 繡像本「金瓶梅」における53回より57回までについて

中國古典小説研究11

橋本 草子 「日記故事」の現存刊本及びその出版の背景について

中國―社會と文化21

有澤 晶子 鄭瑜の雜劇四部作

文學論叢80

林 雅清 「水滸傳」における「好漢」の概念

關西大學中國文學會紀要27

磯部 祐子 明清の通俗文學を讀み解く―「戀」の手引書…書評『明代の遊郭事情―風月機關』

東方306

林 雅清 「黒旋風雙獻功雜劇」の喜劇性―道化の側面から

中國古典小説研究11

井波 律子 白話小説と祝祭

東方305

平塚 順良 「閨一更」考―元明における戀歌の側面―

學林44

内山 知也 曾先之『十八史略』

新しい漢字漢文教育42

廣澤 裕介 『古今小説』の成立と葉有聲

東方學112

大賀 晶子 明末短篇白話小説の形式に關して

中國古典小説研究11

廣澤 裕介 明末江南における李卓吾批評白話小説の出版

未名24

笠井 直美 中國近世白話文學の電子化の現況

名古屋大學中國語文學論集18

張 進徳 『金瓶梅』研究の現狀―面臨的問題―

中國古典小説研究11

張 軼歐 明代白話小説に見る女性の才―「三言」を中心にして―

關西大學中國文學會紀要27

張 軼歐 呂布の裝束―その意味についての考察―

三國志研究1

竹内 眞彦 「驚鴻記」を襲用した『天寶曲史』の梅妃故事について

文學研究103

竹村 則行 『三國志演義』の福建系版本を糸口にして―

3 中國語中國文化

元詩研究會 譯注(一) 戴表元詩

琉球大學言語文化論叢3

兒島弘一郎 「明史樂府」譯注研究のために

中國詩文論叢25

鷺野 正明 明代「古澹派」について(三)

國士館大學漢學紀要8

菅原 尙樹 「迷樓」から「摘星樓」へ―『武王伐紂平話』に見える遺跡について―

東北大學中國語文學論集11

菅原 尙樹 「功は蓋う三分の國、名は成る八陣圖」の詩跡化について―

集刊東洋學95

菅原 尙樹 「功は蓋う三分の國、名は成る八陣圖」の詩跡化について―

集刊東洋學95

菅原 尙樹 「功は蓋う三分の國、名は成る八陣圖」の詩跡化について―

集刊東洋學95

菅原 尙樹 「功は蓋う三分の國、名は成る八陣圖」の詩跡化について―

集刊東洋學95

七、清

福永 美佳	「賓娥冤」における相反する二つの寡婦像	中國古典小説研究 11							
福本 雅一	明清の性靈派	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集	有木 大輔	曹寅の奏摺から見た御定「全唐詩」の成書過程	58	日本中國學會報	寇 振鋒	清末の漢譯小説「經國美談」と戯曲「前本經國美談新義」—明治政治小説「經國美談」の受容をめぐって	名古屋大學中國語學文學論集 18
福本 雅一	尤侗『擬明史樂府』譯注	中國詩文論叢 25	市瀬 信子	袁枚と杭州詩會 通稱「紅樓夢」を味讀する會「ら」のレポート	中國中世文學研究 49	東方 307	兒島弘一郎	「明史樂府」序說—吳炎・潘耒「今樂府」について	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集
源川 彦峰	倪雲林の「狂の餘」の藝術	二松學舎大學人文論叢 76	伊藤 漱平	福州平話西遊記からみる原「西遊記」	東方 307		後藤 裕也	車王府本鼓詞「三國志」の成立過程について—「三國志演義」との関係を中心に—	關西大學中國文學會紀要 27
宮 紀子	「農桑輯要」からみた大元ウルスの勸農政策(上)	人文學報 93	大塚 秀高	福州平話西遊記からみる原「西遊記」	東方 307		坂出 祥伸	龔自珍—憂愁の詩人	新しい漢字漢文教育 42
村山 吉廣	「讀風臆評」論—明代戴君恩の詩經學—	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集	大塚 秀高	「西遊記」の復路	中國文史論叢 2		坂出 祥伸	龔自珍—憂愁の詩人	新しい漢字漢文教育 42
茂曾路和久	「三國志演義」における「義」概念	琉球大學言語文化論叢 3	小川 恆男	黃遵憲「人境廬雜詩」について(下)	中國中世文學研究 49		佐藤 一郎	沈德潛と袁枚の交渉をめぐって	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集
山本範子譯	「五鼠東京を鬧がす」包公收妖傳(一)	颯風 40	寛 久美子	黃遵憲「日本雜事詩」譯注稿(十二)	未名 24		佐藤 浩一	「杜詩詳註」における「論世知人」—浙東鄞縣という文化的磁場—	松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集
遊佐 徹	「西廂記」—大傑作ドラマの誕生と流行の「ドラマ」	靜嘉堂藏清朝陶磁景徳鎮の美	郭 穎	「東瀛詩選」における俞樾修改—服部南郭と荻生徂徠について—	中國學研究論集 17		佐藤 浩一	仇兆勳「杜詩詳註」の音注について—一萬を越す音注が意味するもの—	日本中國學會報 58
遊佐 徹	「封神演義」—壮大なる世界再編の物語の誕生	靜嘉堂藏清朝陶磁景徳鎮の美	顧 春芳	「女仙外史」中道教方術的描寫	言語と文化 5		島 力岡	俞樾と李鴻章…「東瀛詩選」成立をめぐって	大谷大學學院研究紀要 23
遊佐 徹	封神演義研究論文・研究書目録(初稿) 「封神演義」研究の5	中國文史論叢 2	顧 春芳	試析「海上塵天影」的创作動機	大阪府立大學紀要 人文・社會科學 54		竹村 則行	「驚鴻記」を襲用した「天寶曲史」の梅妃故事について	文學研究 103

竹村 則行	『長生殿』譯注 (十三)	中國文學論集 35	土屋 英明	中國の性愛文獻 (11) 『開花叢』四卷	東方 305	武 禧	晩清小説作者掃描 (捌)	清末小説から 83
樽本 照雄	漢譯アラビアン・ナイト (14)	清末小説から 80	土屋 英明	中國の性愛文獻 (12) 『巫夢錄』十卷	東方 306	武 繼平	郭沫若の「寄託小説」の方法	季刊中國 84
樽本 照雄	『漢譯東西洋文學作品編目』とその編者	清末小説から 80	土屋 英明	中國の性愛文獻 (13) 『醉春風』八卷	東方 307	福本 雅一	明清の性靈派	松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集
樽本 照雄	漢譯アラビアン・ナイト (15)	清末小説から 81	土屋 英明	中國の性愛文獻 (14) 『杏花天』四卷	東方 308	松田 郁子	吳趸人の惡玉小説に見られるトリックスター性…「發財秘訣」を中心として	關西大學中國文學會紀要 27
樽本 照雄	潘建國「近代小説的研究現狀與學術空間」を讀む	清末小説から 81	土屋 英明	中國の性愛文獻 (15) 『女仙外史』	東方 309	吉川 榮一	(注解) 秋瑾詩詞全釋(その二)	文學部論叢熊本大學文學部 90
樽本 照雄	漢譯アラビアン・ナイト (16)	清末小説から 82	土屋 英明	中國の性愛文獻 (16) 『子不語』二卷	東方 310	郎 潔	朱彝尊と查慎行の交遊とその文學	東京大學中國語紀要 9
樽本 照雄	『清末小説研究集稿』日本語前言と後記	清末小説から 83	杜 筆恩	『新編增補清末民初小説目録』の品正誤・補	清末小説から 80			
土屋 英明	中國の性愛文獻 (105) 『風流和尚』	東方 299	杜 筆恩	『新編增補清末民初小説目録』の品正誤・再補	清末小説から 82			
土屋 英明	中國の性愛文獻 (106) 『辨證錄』十卷、『長生祕譯』	東方 300	中野 清	袁枚『子不語』の鬼求代説話の筆法 紀昀の批判から	中國詩文論叢 25	青野 繁治	九〇年代以降の中國文學の見取り圖…書評「規範」からの離脱	東方 306
土屋 英明	中國の性愛文獻 (107) 『婦科玉尺』	東方 301	中野 清	袁枚『子不語』の鬼求代説話の筆法 紀昀の批判から	中國詩文論叢 25	青野 繁治	施塾存「將軍底頭」成立の背景資料について	野草 78
土屋 英明	中國の性愛文獻 (108) 『錦繡衣』	東方 302	武 禧	晩清小説作者掃描 (伍)	清末小説から 80	青野 繁治	「過去」を笑う 「紅拂夜奔る」を讀む	アジア遊學 94
土屋 英明	中國の性愛文獻 (109) 『繡葶緣』四卷	東方 303	武 禧	晩清小説作者掃描 (陸)	清末小説から 81	赤羽 陽子	「過去」を笑う 「紅拂夜奔る」を讀む	アジア遊學 94
土屋 英明	中國の性愛文獻 (110) 『巫山艷史』六卷	東方 304	武 禧	晩清小説作者掃描 (七)	清末小説から 82	赤羽 陽子	「過去」を笑う 「紅拂夜奔る」を讀む	アジア遊學 94

八、近、現代

阿川 弘之	臺灣の川柳 葎の髓から 「中國文學(月報)」と中國語―竹内好らの活動を軸として―	文藝春秋11月號	稻畑耕一郎	陳夢家逸詩考―「朶野花」前後― 松浦友久博士追悼記念―中國古典文學論集	大澤 理子	『倫陷期』上海における日本文學の交流―史試論― 章克標と『現代日本小説選集』―日太本出版印刷公司・太平書局出版目録(單行本)	東京大學中國語室 紀要9
秋吉 收	中國文學論集35	岩崎 菜子	戦後10年間の日本における丁玲作品翻譯紹介のなされ方 プランゲ文庫(占領軍檢閲刊行物)より發見された謝冰心の著作等とその意義	野草78	大野 陽介	小説『紅嫂』の成立と變遷 魯迅『呐喊』と近代的作家の登場―1900年代前半の中國における讀書行為と『呐喊』―「自序」魯迅『藤野先生』について	中國文藝研究會 300期記念號
芦田 肇	東京に於ける陳啓修の文學的營爲―詩論、文學評論及び文學作品の翻譯― 「新寫實主義」論 44	岩崎 菜子	新中國と共に歌う―建國三十年詩歌創作の回顧(その3)―	熊本學園大學文學・言語學論集13―1(通卷25)	大東 和重	魯迅の「呐喊」と魯迅の作家の登場―1900年代前半の中國における讀書行為と『呐喊』―「自序」魯迅『藤野先生』について	日本中國學會報 58
阿部 兼也	早期魯迅の科學精神と革命 南洋の北京語文學	岩佐昌暲譯 謝冕 著	中國現代詩の歩み(1919―1950) I 宇宙に焦がれるエリスターテイナー劉慈欣	熊本學園大學文學・言語學論集13―2(通卷26)	大村 泉	老舍文學にみる藝人の形象―苦難からの翻身― 謝冰心の一面―し たたかき―	國學院雜誌107― 6
荒井 茂夫	「人稱」の實驗と「多聲部」の試み―ノールベル賞作家高行健の小説と戯曲―	上原かおり	中國のSF、韓松『紅色海洋』試論 書評・木山英雄『人は歌い人は漢』 『大旗の前―漢詩の毛澤東時代』	野草78	荻野 脩二	張天翼の初期作品―移行する創作スタイルをめぐって	關西大學中國文學部 論集55―4
飯塚 容	「規範」からの離脱―中國同時代作家たちの探索―	上原かおり	中國文藝研究會	291	荻野 脩二	文革新の謝冰心	關西大學中國文學部 論集55―4
飯塚 容	小劇場、前衛劇の試み―林兆華、孟京輝から李六乙、田沁鑫まで―	宇原かおり	中國文藝研究會	291	荻野 脩二	文革新の謝冰心	關西大學中國文學部 論集55―4
飯塚 容	ノールベル賞作家・高行健の世界 書評・梁鳳儀『金融大風暴』と黒木亮『アジアの車』	宇野木 洋	魯迅テクストの讀まれ方―「激辛」評論家・佐高信の場合	中國文藝研究會 300期記念號	尾崎 文昭	「改革と開放」政策のものたらしたものの文化―メディアの状況―	「規範」からの離脱―中國同時代作家たちの探索―
伊藤 徳也	周作人・魯迅をめぐる日中文化交流 岩波講座「帝國」日本の學知5 東アジアの文學・言語空間	宇野木 洋	龍瑛宗の讀んだ中國文學―日本語の翻譯による受容―	關西大學中國文學部 紀要27	尾崎 文昭	底層敘述―打工文學―新・左翼文學	アジア遊學95

加藤 阿幸 論徐志摩詩文古典風範之内在成因

楠原俊代譯 韋君宜 著 『韋君宜回想録』(10) 言語文化 8-4

小谷 一郎 東京左連再建後の中國人日本留學生の文學・藝術運動について(十五) 『藝術聚餐會』(二)

加藤 阿幸 徐志摩詩文における古典的風格の外の要因について

楠原俊代譯 韋君宜 著 『韋君宜回想録』(11) 言語文化 9-1

小谷 一郎 華東師範大學圖書館藏中國近現代文學稀覯本目錄草稿

加藤三由紀 『農民』報と孫伏園

栗山千香子 方法としての記録への印象―史鐵生『記憶與印象』の情景

小谷 一郎 東京左連再建後の中國人日本留學生の文學・藝術運動について(補一)

河尻 和也 『年青的時候』を讀む―潘汝良と西洋

桑島 道夫 「新人類」作家の登場―「身體で書く」女性作家、衛慧、棉棉、そして木子美―

小谷 一郎 談會―中華美術展覽會―および木版畫などについて(その一)

岸 陽子 韓少功の文學―『馬橋詞典』を中心に―

黄 英哲 一九五〇年代臺灣の「國語」運動

小谷 一郎 關西大學中國文學會紀要27

木村 泰枝 張愛玲小説集『傳奇』増訂本に加えられた5篇の小説の書き換えについて

河本 美紀 「笑いの沸點」

小林さつき 一九五〇年代六十年代香港における文學的環境―劉以鬯『酒徒』に見られる作家の葛藤と矛盾

木村泰枝譯 陳思和 著 「試論…五四新文學運動の先鋒性」について

河本 美紀 李碧華の世界―香港が生んだ異色の女流作家―

是永 駿 詩はどのように生まれるのか―中國現代詩シンポジウムに参加して

虞 萍 翻譯…『日中對照』「冰心佚文(謝冰心・成仿吾氏をかこんで)―日中文學懇談會

小谷 一郎 東京左連再建後の中國人日本留學生の文學・藝術運動について(十三)

近藤 直子 殘雪とカフカ 黃遵憲と日本漢詩小説と映畫化張恨水『銀漢雙星』の場合

久下 景子 『臺北人』の主題―考察―人々の「執着」―

小谷 一郎 東京左連再建後の中國人日本留學生の文學・藝術運動について(十四)

坂本ちづみ 宴會B U G 嚴歌苓―境界領域からの発信―

楠原俊代譯 韋君宜 著 『韋君宜回想録』(9)

小谷 一郎 中國文藝研究會 第300期記念號

櫻庭ゆみ子 アジア遊學 94

佐藤普美子	現代漢語詩歌の模索―一九九〇年代詩歌の諸相―	「規範」からの離脱―中國同時代作家たちの探索―	鈴木達明 著 陳平原 譯	文學史の視野のなかの「語り」	中國文學報 71	郁達夫と孫翌・王映霞―家族・愛の視點から― (上)	愛知教育大學 研究報告 55 人文・社會學科編
下村作次郎	臺灣人詩人吳坤煌の東京時代(1929年―1938年)―朝鮮人演劇活動家金斗鎔や日本劇作家秋田雨雀との交流をめぐって―	關西大學中國文學會紀要 27	鈴木 將久 鈴木 基子	張愛玲「對照記」の校勘―本人手稿・コピ版と中國・臺灣の出版書との比較研究―	研究紀要(日本大學經濟學部) 52	「先鋒派文學」からの離脱―蘇童小傳として余華―	アジア遊學 94
謝 惠貞	性欲と權力の中心への想像―李昂『自傳の小説』における寓話―	東京大學中國語中國文學研究室紀要 9	石 其琳	中國現代文學における「微型小説」への視角	筑紫女學園大學・短期大學部紀要 1	葉紹鈞雜記(續)―「幽默的啓示」をめぐる―	中國文藝研究會 300期記念號
葉 石濤	私の臺灣文學六十年	植民地文化研究創刊	關口 知實	魯迅と現代版畫―谷中安規と「白と黒」―『版藝術』から―	關西大學中國文學會紀要 27	北京の「茶館」―「德順興」―聽書記―	中國文藝研究會 292
白井 澄世	【研究ノート】師陀作品の改訂に關する感想、及び『師陀全集』について	中國文藝研究會 300期記念號	關根 謙	「集團幻想」から六〇年代の中國―一九六〇年時代の挑戦―	「規範」からの離脱―中國同時代作家たちの探索―	福建信世「支那の芝居スケッチ帖」について	中國文藝研究會 300期記念號
白水 紀子	活躍する女性作家―鐵凝『大浴女』にみる娘の成長物語―	「規範」からの離脱―中國同時代作家たちの探索―	關根 謙	「文學の越境」―海外華人小説を支える世界―虹影・黃寶蓮を例にして―	アジア遊學 94	潘建國「近代小説的研究現狀與學術空間」を讀む	清末小説から 81
任 景波	王朔の小説とその時代背景	言語と文化 愛知大學語學教育研究室紀要 14 (通巻 41)	戴 煥	郭沫若におけるタゴール評價の問題―遷を通して―	アジア遊學 別冊 3	文學の機能、サブカルチャーの力	アジア遊學 94
杉野 元子	狼が来た!―二十世紀中國文學における狼像―	アジア遊學 94	田井 みず	張煒「古船」―象徴的形象の意味するもの	中國文化研究 6	わたしたちはどこへ行くのか?―グロリアゼーション下の都市文化―	「規範」からの離脱―中國同時代作家たちの探索―
杉村安幾子	傳雷と『新語』	言語文化論叢 10				翻譯「何をやるって?」―原作 盧隱	中國文藝研究會 300期記念號
			陳 愛傑	周作人の前期の翻譯活動について	中國文化研究 6	『中國式離婚』について	中國文藝研究會 300期記念號

徳間 佳信 「空蟬」の行方
―格非「人面桃花」
を読む― 野草78

涂 曉華 雜誌『女聲』の歴
史的考察―その殖
民性の特徴と意義
について― アジア遊學 別
冊3

鳥谷まゆみ 周作人における
『都會詩人』―張
岱『陶庵夢憶』を
中心に― 九州中國學會報
44

永井 英美 魯迅作品『離婚』
の中の『屁塞』を
巡って―讀書ノ
トから(その3)― 中國文藝研究會
第30期記念號

長堀 祐造 永久革命者の悲哀
―もし魯迅が生
きていたら―論争
覺書―下 慶應義塾大學日
文紀要 言語・文
化・コミュニケーション 36

長堀祐造譯 胡風遺著讀後感
王凡西 著 慶應義塾大學日
文紀要 言語・文
化・コミュニケーション 37

中村みどり 『留東外史』と武
俠小説 中國文藝研究會
第30期記念號

根岸宗一郎 近代中國における
ギリシア文學―周
作人と羅念生を中
心に― 慶應義塾大學日
文紀要 言語・文
化・コミュニケーション 36

野間 信幸 望江樓 中國文藝研究會
第30期記念號

萩野 脩一 謝冰心の一面―し
たたかき 關西大學中國文
學會紀要27

花登 正宏 魯迅の日記より見
た書籍購入傾向の
變遷 東北大學中國語
學文學論集11

濱田 麻矢 張愛玲のレシビ
關於魯迅與日本近
代自然主義文學の
問題―从成仿吾
《吶喊》的評論
(1924)談起 中國文藝研究會
第30期記念號

潘 世 戰後の日本文學―
在外日本人作家・
在日外國人作家を
中心に 言語文化論究21
岩波講座『帝國』
日本の學知5
東アジアの文學・
言語空間

福家 道信 書評・『人は歌い
人は哭く大旗の前
漢詩の毛澤東時代』
291 中國文藝研究會

藤井 敦子 日中戦争期延安に
おける女性言説―
雜誌『中國婦女』
を中心に― 藝文研究 90

藤井 省三 魔術的リアリズム
が描く中國農村―
鄭義、莫言と大江
健三郎― 「規範」からの
離脱―中國同時
代作家たちの探
索―

藤井 省三 世紀末中國で甦っ
たカフカ―書評
『魂の城』 東方 305

藤井 省三 中國の北京語文學
―日本の學知5
東アジアの文學・
言語空間 岩波講座『帝國』
日本の學知5
東アジアの文學・
言語空間

藤井 省三 日本における臺灣
北京語文學の受容
岩波講座『帝國』
日本の學知5
東アジアの文學・
言語空間

藤田 一乘 「去國集」の成立
とその意義 中國言語文化研
究6

下 推行 葉廣今の「到家」
―に見る對日觀―日
本側の立場から見
て― 中國文藝研究會
第30期記念號

牧 陽一 父、息子、畫家の
夢―失われゆく北
京の路地で 映畫
―胡同のひまわり―
| 中國現代アートが
讓れないもの
黄銳 不衰の一鼓
作氣 變革と保守―ポ
ト前衛は成り立つ
か 中國現代ア
トと女 中國現代ア
トへ 中國現代ア
トへ

牧 陽一 中國現代アートが
讓れないもの
黄銳 不衰の一鼓
作氣 變革と保守―ポ
ト前衛は成り立つ
か 中國現代ア
トと女 中國現代ア
トへ 中國現代ア
トへ

牧 陽一 中國現代アートが
讓れないもの
黄銳 不衰の一鼓
作氣 變革と保守―ポ
ト前衛は成り立つ
か 中國現代ア
トと女 中國現代ア
トへ 中國現代ア
トへ

牧 陽一 中國現代アートが
讓れないもの
黄銳 不衰の一鼓
作氣 變革と保守―ポ
ト前衛は成り立つ
か 中國現代ア
トと女 中國現代ア
トへ 中國現代ア
トへ

牧野 格子 グレース・ポイン
トンについて―謝
冰心、楊剛との交
流を中心に― 關西大學中國文
學會紀要27

王柄根 著 中國文學史上の福
建の文學者たち 關西大學中國文
學會紀要27

丸尾 常喜 「阿Q正傳」再考
―「類型」につい
て― 中國學志 21

水野 衛子 中國社會派エンタ
テインメント小説
登場…書評『十面
埋伏』上・下 東方 301

宮入いずみ 「反腐敗小説」を讀む―「當代中國社會寫實小説大系」から見えるもの
アジア遊學 94

森雅子 周作人傳(二三)
颯風 40

錢理群 中國の兒童文學と賀宜
3 中國語中國文化

八島 沙繪 國立北京女子高等師範學校校長許壽裳の辭職をめぐる前奏
關西大學中國文學會紀要 27

山内 一恵 「規範」からの離脱―中國同時代作家たちの探索―
「規範」からの離脱―中國同時代作家たちの探索―

山口 守 夜の對話からマイナー文學まで―史鐵生、ザンダワ、アーライ
岩波講座「帝國」日本の學知 5

山口 守 植民地・占領地の日本語論―臺灣・滿州・中國の二重言語作家
東アジアの文學・言語空間

山下 一夫 車王府曲本所收皮影戲考―北京東西兩派との關係を中心に―
中國都市藝能研究 4

山田 敬三 異常な時代の記憶―書評「幌馬車の歌」
東方 306

遊佐 徹 中國近代文化史研究―中國近代の自己デザイン
科學研究費成果報告書 1510487

横打 理奈 郭沫若と『楚辭』―「晨安」に見る飛翔を手掛かりに
神話と詩…日本聞一多學會報 5

吉川 龍生 王朔・池莉の作品とメディア戦略
アジア遊學 94

好竝 晶 霞飛路と「再話」―「上海倫巴」を觀て―
中國文藝研究會 300期記念號

鷺巢 益美 だから李馮はやめられない―『信徒』を讀む―
アジア遊學 94

和田 知久 「你別無選擇」の「first impact」
中國文藝研究會 300期記念號

渡邊 新一 第三詩人の登場―「私は信じない」から「たゞそれだけ」へ―
アジア遊學 94

渡邊 晴夫 孫犁にとっての抗日戰爭
國學院中國學會報 51

渡邊 博文 近代中國文學作品における罵倒語の使用の要因―情動による考察―
神奈川大學大學院言語と文化論集 12

芳村 弘道 朝鮮本『夾注名賢十抄詩』中の「梁山伯祝英臺傳」と「梁祝故事」説唱作品との關聯
松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集

林 宇萍 漢川善書における傳統宣講の繼承と變容
九州中國學會報 44

岡田 充博 「殺人祭鬼」―溯源
名古屋大學中國語學文學論集 18

岡部 隆志 繞る歌掛け―中國雲南省白族の2時間47分に渡る歌掛け事例報告―
紀要 共立女子短期大學文科 49

河岡 亮子 中國通俗文藝における頂羽像と虞姬像の變容について
高知大國文 37

近藤 良樹 畏怖される龍・おちのちのルーツ―神話・昔話のうちの蛇たち―
廣島大學大學院文學研究科論集 66

繁原 央 中國の小島前生譚(五)―追加資料
常葉學園短期大學紀要 37

徐 斌 「チベット」の紋事詩「ケサル傳説」
季刊中國 87

鈴木 陽子 中國の田螺女房
アジア文化學科年報 9

高橋 忠彦 中國の喫茶の重層性―詩語と眞實
アジア遊學 88

土屋 肇枝 祈りの回復―『額爾古納河右岸』とエヴインキ族
アジア遊學 94

野村 伸一 四平戲―福建省政和縣の張姓宗族と祭祀藝能―
慶應義塾大學日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション 37

青山 英正 振氣から教化へ―勤王志士詩歌集のゆくえ―
國語國文 75―10 通卷 866

九、民間文學・習俗

十、日本漢文學

淺見 洋二	「文章」小技 五山禪林の詩僧に とつての「道」と 「詩」	アジア遊學 93	後藤 淳一	詞と訓讀	松浦友久博士追 悼記念中國古 典文學論集	中谷 征充	空海漢詩文研究 「護命の八十壽に 對する賀詩序二首 について」	高野山大學院紀 要 9
有馬 卓也	岡本韋庵『大日本 中興先覺志』譯注 (その二)	言語文化研究 徳島大學總合科 學部 14	繁原 央	庚辰・辛巳の雜稿 ——山梨・稻川詩譯注 (十五)——	國文瀨名 27	中谷 征充	一世賜姓と良岑安 世	密教學會報 44
一戸 涉	荷田信郷の雅交と 『開齋漫吟』の出 版	國學院雜誌 107— 11	七田麻美子	山寺詩「慈恩詩を 中心に」	アジア遊學 別 冊 3	中谷 征充	空海漢詩文研究 「良岑安世に送つ た詩五首」	密教文化 216
荻野 恭茂	虹と日本文藝(十 二)續——中古散文 (付日本漢詩)を めぐって(2)——	椋山女學園大學 研究論集 37	周 以量	日本の詩歌におけ る菊のイメージ 菅原道眞の漢詩を 視點として——	アジア遊學 別 冊 3	中丸 貴史	私日記の發生と展 開——覺書——外記の 變容を通して——	アジア遊學 別 冊 3
何 欣泰	森鷗外の漢詩文に おける一人稱代名 詞について	岡大國文論稿 34	高橋 俊和	堀景山「詩稿」 (四)	日本文學會誌 18	西原 千代	菅茶山と頼山陽	中國學論集 42
加藤 國安	新發見の子規? 「漢詩稿」——親友、 竹村鍛のものか	新しい漢字漢文 教育 42	高橋 朱子	漱石「函山雜咏」 試考	漢文學學會會報 64	西原 千代	菅茶山と頼春水	中國學論集 43
加島 吉春	和歌の題詠におけ る「句題」の概念 を巡って	アジア遊學 別 冊 3	高橋 忠彦	「童蒙頌韻」の表 現——中國の古典の 關わりを中心とし て——	アジア遊學 93	二宮 俊博	津阪東陽「杜律詳 解」譯注稿(六)	椋山女學園大學 文化情報學部紀 要 5
神鷹 徳治	三たび『文集』は 「もんじゅう」か 「ぶんしゅう」か ——同音衝突と同音 回避の現象から——	松浦友久博士追 悼記念中國古 典文學論集	瀧川 幸司	(書評)波戸岡旭 著「宮廷詩人菅原 道眞——「菅家文庫」の 世界——」	國語と國文學 平成 18 年 7 月號	福井 辰彦	「經國集」試帖詩 考	松浦友久博士追 悼記念中國古 典文學論集
川合 康三	和漢聯句の世界	二松學舎大學人 文論叢 77	谷口 匡	西遊する頼山陽と 「杜韓蘇古詩鈔」	アジア遊學 93	福井 辰彦	明治漢詩と王士禛 ——「新文詩」所收 作品から——	國語國文 75—11 通卷 86
神田 正行	毒婦阿蓮の造形—— 「新編金瓶梅」の 勸善懲惡——	藝文研究 91—1	徳田 武	芙葉館二代目服部 仲英論	松浦友久博士追 悼記念中國古 典文學論集	堀 誠	森春壽「新湯竹枝」 をよむ (書評)杉下元明 著「江戸漢詩」影 響と變容の系譜	國語と國文學平 成 18 年 2 月號
			朽尾 武	橋本關雪「南船集」 小考——山田俊雄先 生を偲ぶ——	成城國文學 22		道眞「九月十日」 詩篇考	松浦友久博士追 悼記念中國古 典文學論集

本間 洋一
著『書評』波戸岡旭
道眞―『菅家文庫』
・『菅家後集』の
世界―
9 國學院雜誌107―

十一、比較文學

郭 穎
『東瀛詩選』にお
ける俞樾の修改―
廣瀨旭莊の『梅墩
詩鈔』との比較を
通して―
16 中國學研究論集

道坂 昭廣
津坂東陽『夜航詩
話』譯注稿(七)
『唐物語』の心象
世界―第十八話
『楊貴妃』をめぐつ
て―
歴史文化社會論
講座紀要3

岩坪 健
源氏物語注釋書に
見える中國古典
日本における『三
國演義』の受容
(前編)―翻譯と
挿圖を中心に―
アジア遊學 93
金澤大學中國語
學中國文學教室
紀要9

神鷹 徳治
『文集』と『白氏
文集』―角倉素庵
『滬遊雜記』と
『上海繁昌記』に
ついて
アジア遊學 93

森下 要治
郷土の優れた漢詩
文の「魅力ある教
材化」にむけた一
試案
新しい漢字漢文
教育43

内山 精也
『遊仙窟』と黒河
春村
アジア遊學 93
汲古50

神田龍之介
『伊勢物語』第六
十九段試論―唐代
傳奇『鶯々傳』と
の比較を中心に―
粟田障子詩にみる
大江匡衡の白居易
受容
國語と國文學
平成18年3月號
アジア遊學 別
冊3

森元 弘毅
大江匡房『秋深夜
漏闌詩序』譯注
大江匡房『秋深夜
漏闌詩序』考
アジア遊學 別
冊3

於 國瑛
『源氏物語』の終
焉とトボロジ―
『長恨歌』・七夕・
浦島傳説との関わ
りから―
アジア遊學 別
冊3

木戸 裕子
『擧目見日、不見
長安』の變容―新
古今集九五九番歌
の中國文學的背景
―
アジア遊學 別
冊3

吉原 浩人
賴山陽と田能村竹
田
中國學論集42

大澤 理子
『交流』―史論の
おける日中文學の
章克標と『現代日
本小説選集』―太
平書局出版目録
(單行本)
東京大學中國語
學中國文學研究室
紀要9

金 中
『徒然草』におけ
る『蒙求』―『蒙求
和歌』の受容につ
いて
中國詩文論叢 25
岡大國文論稿 34

賴 多萬
賴山陽の「母を詠
ふ詩」(上)
中國中世文學研
究50

太田 亨
禪林における杜詩
注釋書需要の一側
面
アジア遊學 93

金 文峰
『新撰萬葉集』に
おける漢詩への一
視點―夏の「蟬」
をめぐって―
國語と國文學
平成18年3月號

賴 多萬
大沼枕山詩におけ
る「貧窮」につい
て―梁田蛻巖詩受
容の檢證―
國語論文75―11
通巻86

岡部明日香
近代の源氏物語の
漢譯受容―川合次
郎と『紫史』―
アジア遊學 別
冊3

吳 衛峰
清末の漢譯小説
『經國美談』と戯
曲『前本經國美談』
新義―明治政治
小説『經國美談』
の受容をめぐつて
名古屋大學中國
語學文學論集18

鷺原 知良
東北の漢詩(七)
―八幡公勿來關
圖―詩について―
14 東北文學の世界

寇 振鋒
『東瀛詩選』にお
ける俞樾の修改―
廣瀨旭莊の『梅墩
詩鈔』との比較を
通して―
中國學研究論集

渡部 英喜
東北の漢詩(七)
―八幡公勿來關
圖―詩について―
14 東北文學の世界

寇 振鋒
『東瀛詩選』にお
ける俞樾の修改―
廣瀨旭莊の『梅墩
詩鈔』との比較を
通して―
中國學研究論集

寇 振鋒
『東瀛詩選』にお
ける俞樾の修改―
廣瀨旭莊の『梅墩
詩鈔』との比較を
通して―
中國學研究論集

黄 智暉 (書評) 崔香蘭著『馬琴讀本と中國古代小説』 國語と國文學 平成18年3月號

黄 智暉 馬琴讀本における春秋の筆法―『女仙外史』の影響を手掛かりに― 國語と國文學 平成18年7月號

蔡 毅 黄遵憲と日本漢詩 中國文學報 71

司 亞娟 一九二〇年代後半の與謝野晶子について―中國との關わりを視座として― 九州産業大學國際文化學部紀要 34

静永 健 『平安文人たちと『白氏文集』』 アジア遊學 93

新間 一美 源氏物語柏木卷における白詩受容 白居易研究年報 7

瀨間 正之 記紀歌謠と漢籍教養―古事記に於ける歌謠詞章の更新― 上代文學 97

孫 容成 中巖圓月の楊雄觀 アジア遊學 別冊 3

高松 壽夫 萬葉歌の表現と漢詩の表現―特に身體所作にかかわる表現をめぐって― アジア遊學 別冊 3

竹村 則行 清代小説の翻案と翻譯をめぐって―楮人樓『隋唐演義』を和文に翻譯された中文に翻譯された宮崎繁吉『楊貴妃』― 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

竹村 則行 明治日本の『支那文學史』と清末民初中國の『中國文學史』 九州中國學會報 44

辰巳 正明 國學における和歌論の復古思想―中比公安派の性靈説との關わりから― 國學院雜誌 107

立石 展大 (書評) 繁原史著『日中説話の比較研究』 國學院雜誌 107

張 哲俊 諸曲『猩猩』における菊花酒と竹の葉の酒 アジア遊學 別冊 3

塚越 義之 芭蕉俳諧を取り巻く中國古典―禪林への流れ― 文學・語學 185

鄭 美京 『金色夜叉』と『長恨夢』に關する考察 比較社會文化研究 19

中川 博夫 治世の音、亡國の音―中世文學の中國小論― 文學・語學 185

中里見敬譯 リウ著 ロビンソン・クルソーの土器の壺 言語文化論究 21

丹羽 博之 大和田建樹作詞『旅泊』と唐張繼『楓橋夜泊』・明治唱歌による和洋中文の融合 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

林田愼之助 廣瀬淡窓と陶淵明 松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集

潘 世 關于魯迅與日本近代自然主義文學的問題―从成仿吾『吶喊』的評論(1924)談起― 言語文化論究 21

福井 辰彦 明治漢詩と王士禛『新文詩』所收作品から― 國語國文 75―5 通卷 86

本間 洋一 王朝漢詩と海彼―東アジアの漢詩をめぐる臆説― 文學・語學 185

牧野 格子 グレリース・ボイントンについて―謝冰心、楊剛との交流を中心― 關西大學中國文學會紀要 27

溝部 良恵 張鷟『遊仙窟』と萬葉の人々 アジア遊學 93

三田多文恵 諸曲(唐事)の研究―『白樂天』の成立とその背景―『唐船』の成立とその背景 中國學論集 42

三田多文恵 諸曲『芭蕉』の成立とその背景 中國學論集 43

諸田 龍美 尾崎紅葉『多情多恨』と『李夫人』『長恨歌』 人文學論叢 8

諸田 龍美 『俗なるもの』の興起―中唐戀情文學と平安朝かな文學の共鳴― アジア遊學 93

吉川 徹
空海の書論に影響を與えた中國書論と雅趣について『性靈集』『敕賜屏風書了即獻表』を中心として
愛知論叢 80

和田 英信
中國の詩話、日本の詩話
お茶の水女子大學中國文學會報 25

十二、書誌

郁 賢皓
咸淳本《李翰林集》源流和名稱簡論
松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集

石岡 浩
北宋景祐刊『漢書』刑法志第十四葉の復元―前漢文帝刑法改革詔の文字の増減をめぐって―
東方學 111

井上 泰山
スペイン國立圖書館所藏漢籍目録(古典の部)
關西大學中國文學會紀要 27

井上 泰山
トレド聖堂參事會圖書館藏『千家詩』(萬曆刊本殘卷)について
汲古 49

高橋 良政
『韓詩外傳』の書誌的考察―寶曆九年星文堂刻本について―
櫻文論叢 66

長尾 直茂
朝鮮版『三國志漢義』管見―書通俗三國志』との關連をめぐる試論
漢文學解釋與研究 19

道坂 昭廣
テキストとしての正倉院藏『王勃集詩序』
アジア遊學 93

屋敷 信晴
『太平廣記』明野竹齋鈔本について―卷三―漢武帝』を中心に
中國中世文學研究 49

芳村 弘道
靜嘉堂文庫所藏古鈔無注本『文選』卷十殘卷校記
學林 44

十三、前集の補足と訂正

大塚 秀高
献上されなかつた佐伯文庫本の行方・續―『日本現存稀見元明文集考證與提要』について―
埼玉大學大學院文化科學研究紀要 2 日本アジア研究 2

大塚 秀高
佐伯文庫舊藏暨現存書目録(漢籍の部)
平成15年度科学研究補助金(特定領域研究)(2)研究領域研究(2)『江戸時代における漢籍の流轉―佐伯文庫を例として―』第一分冊

大塚 秀高
方功惠碧琳瑯館舊藏漢籍總合目録(第二稿)
平成15年度科学研究補助金(特定領域研究)(2)研究領域研究(2)『江戸時代における漢籍の流轉―佐伯文庫を例として―』第二分冊

大塚 秀高
佐伯文庫本關係論文
研究領域報告書(2)『江戸時代における漢籍の流轉―佐伯文庫を例として―』第三分冊

中川 諭
六卷本『三國志英雄傳』について『三國志平話』と『三分事略』
東アジア出版文化の研究―學問領域として―書誌・出版の研究を確立するために(平成12年度科学研究補助金)研究特異成果報告書

中谷 征充
空海漢詩文研究『雜言詩・贈野陸州歌并序について』
密教文化 214

牧 陽一
中國現代アートに現れた(中華)海外のアート―北京から―
ユリイカ 35―1 2003年

牧 陽一
プロバガンダと中國現代アート
B T 美術手帖 55 838 2003年
世界文學 100 2004年

牧 陽一

マシオン化した身體を收縮させる 多元文化と未來社會

矢羽野隆男

「長恨歌」の主題と構成―「李夫人」・悼亡詩との比較から― 日本語日本文化論叢 植生野4

はじめに

ローテーションであるということ、學界展望（文學）の仕事を抑せつかったが、到底任に堪えないことを改めて痛感している。二〇〇六年に發表された夥しい論文をすべて読むことは、もとより不可能であった。せめて單行本だけは、と思いつつも、ついに目を通し得なかった本が、少なからずある。とはいえ、單行本全體のうち、擔當者が目踏しえた比率は、論文全體におけるそれよりも、はるかに高い。加えて單行本全體が、いくつかの論文をまとめた集大成としての意味を持っている。以上の二點により、本欄ではもっぱら單行本を対象に記述を進めたい。その中でも研究書と譯注書を中心として、狭い知見の範囲ではあるが、いくばくかの紹介とコメントを綴って、責めを塞ぎたく思う。

さて、それら百を優に越す單行本群を切り分ける基準であるが、これらはなほだ藝の無いことながら、「學界展望」にすでにある十二分類の枠を、そのまま使わせていただきたいと思う。擔當者が隨意に設定した枠では、重要な著書を紹介し損なってしまいかもしれない、という危惧からである。それでもなお、取りこぼしてしまう対象は少なくないであろうことを懸念しつつ、「一、總記」から概観していきたい。

一、總記

『松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集』が、發刊された。六五名の研究者が論考を寄せた、一千頁を越える大著である。目次には、中國の古典文學研究者二名を筆頭に、日本を代表する研究者各位と、松浦氏が薰陶を施した高弟たちが名を連ねる。それらの論考の対象は、先秦から近現代までを覆い、詩歌のみならず、小説、戯曲、音韻學、日本漢學にも及ぶ。大家各位の論文はもとより讀み應えがあるが、若手の高弟たちの作も、執筆者が多いためにおそらくぎりぎりに切り詰められたであろう枚數にもかかわらず、満を持しての發表とおぼしいものが少なくない。故人の學徳がしのばれる。

專著では、中嶋隆藏『中國の文人像』がある。この書は、漠然と「文人」と目されている人物を取り上げたものではなく、その中に「文人」という語のある文章を、漢代から民國に至るまで追跡し、考察したものである。その方法的嚴密さが印象深い。考察の結果、文人像に大きな變化があらわれるのは、二〇世紀初頭の歐米列強の壓迫以後ではないか、とする。その二〇世紀初頭以後の中國近代の文人論が、文人の存在意義と使命をめぐって、有用か無用か、その「有用」とはいかなる意味か、を切實に問うている點に着目し、現代の我々に通じる問題提起であるとして、思いを深めている。

專著にはさらに、鹽見邦彦『中國の「紀年」詩』がある。自身の年齢を詠み込んだ詩を「紀年」詩と

命名し、著書の前半では、古代から清代までの「紀年」詩を概観した上で、六朝から金代までと『全臺詩』の「紀年」詩を考察している。後半は、一九九六年に上梓された同氏『唐詩口語表現の研究』の續編であり、宋代の楊萬里と陸游の詩の口語表現を探索している。

なお「總記」には、今村與志雄編『橋川時雄の詩文と追想』、張競『アジアを讀む』も含まれている。

前者は、中國文學者の橋川時雄氏（一八九四年～一九八二年）の詩文や、日中戦争前後とその當時の東方文化事業總委員會・北京人文科學研究所に關係する資料と言説、それに橋川氏への追憶集を収めたものであり、純然たる研究書とはいいがたい。後者は、八〇篇の書評から成るが、その対象は中國文學だけに限られない。しかもともにすてがたかったので、ここに入れた。ことに前者に収められているさまざまな言説は、半世紀以上の時を経ているにもかかわらず、ちょうど前掲した中嶋氏の著の取り上げている中國近代の文人論がそうであるように、今に通ずる問題を、多く提起しているように見える。

「總記」にはほかに、非専門家の讀み手をも視野に収めた、漢詩に關わる單行本が多い。定評のある舊著を改訂した書や、CDや寫眞付きで視聽覺に訴える書など、さまざまに工夫が凝らされている。

二、先秦

先秦の部には、五件の『詩經』を扱った書が並ぶ。

學界展望（文學）二〇〇六年一月～十二月

牧角悦子『中國古代の祭祀と文學』は、聞一多の古代觀を架橋として、『詩經』と『楚辭』とを結びつけている。中國文學の發端となる二大詩歌集について、「その本質を古代における祭祀と信仰から切り離して考えることはできないものである。」という認識のもと、兩書を古代祭祀との關連から跡づけつつ、中國の古代文學が祭祀から生まれたものであることを、具體的に説き明かしている。

發生論を中心とした牧角著に對し、加納喜光『詩經・I 戀愛詩と動植物のシンボリズム』と『詩經・II 古代歌謠における愛の表現技法』は、『詩經』におけるレトリックを分析している。Iでは、國風の戀愛詩・婚姻詩から、おもに動植物のシンボリズムを取り上げる。IIでは、パラディグム變換・類型表現・定型句・アナグラムなどに注目し、さらに國風の十八のモチーフについて考察を加えている。

小南一郎『古代中國 天命と青銅器』は、西周王朝の中期に視點を据え、西周の王權支配に關わる人々が、自分たちがその中にある社會體制をどのように意味付け理念化しようとしていたのかを、同時代史料である青銅器の銘文を中心にして、分析している。豊富な考古學資料に、古典文獻が組み合わされて、當時の神話的觀念が浮き彫りにされていく。

松田稔『『山海經』の比較的研究』は、一九九五年に上梓された同氏『『山海經』の基礎的研究』の續編に位置する。書の前半では、『山海經』と、記述上共通點を持つ『尚書』禹貢、『列子』、『呂氏春秋』、『淮南子』、『楚辭』とを詳細に比較して、『山

海經』の傳承の古さを明らかにする。後半では、山經・海外經・大荒經の成立順次を比定するとともに、『山海經』の鳳凰の記述や精衛傳承を考察している。

三、漢魏晉南北朝

この部では、『嘉靖本 古詩紀』全三卷の完成を、まづもって喜びたい。興膳宏、横山弘、齋藤希史の三氏により、京都大學文學部所藏の良質の版本が、研究者すべてに讀みやすい形で提供された。かつて七〇年代には足利本『文選』が影印され、九〇年代には、中島敏夫氏の盡力により、内閣文庫本『古詩類苑』『唐詩類苑』の影印が實現した。それらとともにこの本は、善本を藏する研究機關に屬する者こそでない者、そうした研究機關に容易に通える者とそうでない者、その兩者の間の大きな格差を埋めてくれる。學界における格差社會は正の意義を持つこうした影印事業が、今後も繼續し擴大していくことを、地方在住者としては、望むばかりである。

そうした善本をもとにいていねいな譯注を施したのが、竹田晃・黒田眞美子編譯『世說新語』、佐野誠子編譯『搜神記・幽明錄・異苑他』、そして森野繁夫『庾子山詩集』である。いずれも分かり易い譯によって中國文學研究のすそ野を擴げるとともに、専門家には、比較と參照を通して、自らの讀解をさらに練り上げる契機を提供している。

右の四書が、研究の基盤を固め、あるいは擴げる意義を擔うものであるとするなら、安藤信廣・大上

正美・堀池信夫編『陶淵明―詩と酒と田園』は、汗牛充棟の陶淵明研究や陶詩譯注の蓄積の上に立って、百尺竿頭一步を進めんとした試みである。とはいえ「一步を進めん」との氣負いはさらになく、九年前のシンポジウムをもとに、九名の研究者によって熟成された、古酒のような趣きがある。讀み解き盡くされたかのように見える陶淵明テクストは、一句一句を丁寧に讀むその果てに、それぞれの讀み手固有の世界を、なおも擴がらせる空言を有している。我々の周圍に溢れる使用されては消費されてゆく言葉群と、それは異質であることを感じさせ、古典文學の「有用」性とはなにかを、改めて考えさせてくれる。

四、隋唐五代

この部においても、靜嘉堂文庫藏の南宋版と目される善本の影印本が、發刊されている。米山寅太郎・高橋智解題の『李太白文集』であり、二〇〇六年の間にその1(巻一から巻十四)と2(巻十五から巻三十)がともに刊行されるという迅速さである。

善本に據った譯注の仕事が、この部にも見出される。竹田晃・黒田眞美子編譯『枕中記・李娃傳・鴛鴦傳他』と、岡村繁『白氏文集 8』である。

後者は那波本『白氏文集』巻四五から巻五〇までの、「策」七九篇と「判」百篇とを収める。「策」は、白居易が制科に備えて作成した模擬答案、「判」も、受験準備のための模擬判決文であるという。いずれも文學畑にはなじみの薄い文章であるが、白居易研

究にはもとより、初期の科擧研究や唐令の復元研究にも、必須の史料とされる。一見地味だが、じつは重要なこの部分の譯注稿を擔當したのは、東英壽、阿部泰記、中筋健吉の三氏である。

白居易に關しては、專著が二件出ている。下定雅弘『白樂天の愉悅―生きる叡智の耀き―』と、埋田重夫『白居易研究―閑適の詩想―』で、ともに白居易の後半生と閑適詩に注目している。二十世紀中頃までの白居易研究が、その前半生と諷諭詩・感傷詩に集中していたことを思うと、白居易研究の變化と深化がうかがわれる。

下定氏の書は、同氏『白氏文集を讀む』の成果の上に、さらに十年の蓄積を経て發刊されている。書の前編では、白樂天の生涯を追いつつ「生きていく上で彼がどのような知恵をはたらかせたのか」を考察する。後編では、「女性」「友情」「衣食住」「動物たち」「植物(草花)」「趣味」「養生」「詩歌」と、その「愉悅」の對象を記述し、白居易の生活の多面性を浮かび上がらせる。

埋田氏の著は、白居易の定義した閑適詩の概念を擴大した、「廣義の閑適詩」を提唱する。それらは「復原・蘇生」の詩想に關わるものとして、「身體と姿勢」「衰老と病死」「住居と家族」の三面から考察される。「枕草子」における清少納言の機知的な受け應えて有名な、遺愛寺の鐘を「欵枕聽」という三字も、白詩の「身體と姿勢」表現の中に位置づけられて、新たな解釋が試みられている。

松本肇『唐代文學の視點』も、その第五編に、白

居易についての論考を収める。ただしこちらは閑適詩ではなく、寓言文學としての諷諭詩と、古文家との關連でみた散文を、新たな視點から照射する。白居易のほかには、韓愈、柳宗元、李賀、孟郊、賈島、劉禹錫と中唐の代表的な詩人が網羅され、さらに彼らの先驅としての杜甫が取り上げられている。加えて、唐詩に見える王昭君や桃花源の描かれ方に對する考察が付されている。

後藤秋正『唐代の哀傷文學』は、一九九八年に上梓された同氏『中國中世の哀傷文學』の續編と言ふべき書である。前者では、漢魏六朝の臨終詩や送葬詩など、人の死にまつわる哀傷を主題とする詩歌が考察されていた。それらが唐代に至ってどのような展開を見せたかが、實際の作品に即して明らかにされている。たとえば、臨終詩の展開の多様化、送葬詩の主題意識化、杜甫の墓を詠じた詩群などが論じられ、幼兒の詩を悼む詩群では、元稹や白居易の詩が、轉換點となることが指摘される。

五、宋

宋代の部には、少數ながら、重厚な書が並ぶ。

寛文生・野村鮎子『四庫提要南宋五十家研究』は、二〇〇〇年に上梓された兩氏の『四庫提要北宋五十家研究』の續編である。前者が、同提要の集部別類に收められる北宋百五十家、百二十二種から選んでいるのに對し、本書は、その二倍以上の南宋二百六十七家、二百七十四種から、五十三家、五十七種

を精選している。その五十三家の提要に、詳細な譯注が施され、南宋の文學史が見渡せるようになってくる。文學者のみならず朱熹、呂祖謙、陸九淵らの別集も含んでいて、思想史研究にも有用であり、能う限り複数の版本を實現したという、地道な努力の集積が結實している。

村上哲見『宋詞研究 南宋篇』も、三十年前に上梓された同氏『宋詞研究 北宋篇』の續編であり、完結編である。宋詞を豪放派と婉約派とに分ける根強い舊説を、現實派と典雅派との枠組みに脱構築し、前者から辛棄疾を、後者から姜夔、吳文英、周密をとりあげて論じている。文字通り日本の詞學研究の先陣を切ってきた村上氏であるが、ここ二十年來、より若い研究者たちによる詞學關係の專著が増え、近年には、會誌『風絮』を擁する「宋詞研究會」が発足した。同會は、同様に活動の目覺ましい「宋代詩文研究會」（會誌は『橄欖』）と合同して、「宋代文學研究談話會」を開くに至っている。村上氏の著は、右の「宋詞研究會」の發足と活動に促されて成ったという。先驅者を慕い、彼に牽引されてきた若手たちが、その先驅者をさらに後押しする、そんな慶ばしい循環が起きている。

六、金元明

対象とする時期が早い順から見えてゆくが、最初に挙げるべき宮紀子『モンゴル時代の出版文化』の紹介は、哲學の部門に讓って割愛する。

學界展望(文學) 二〇〇六年一月〜十二月

田仲一成『中國地方戲曲研究—元明南戲の東南沿海地區への傳播—』は、「浙江に發した宋元南戲が明清を通じて、東南沿海に沿って南流し、福建を経て廣東東部に流傳していった経過を検討したものである」。よってその対象とする時代は、副題の元明に止まらず、宋代から現代に及んでいる。田仲氏は、八十年代から九十年代にかけて、四冊の現地調査報告書を公刊している。本書は、それら四冊の續編であるとともに總括でもある。一千に及ぶ頁には、溢れんばかりの舉例と現地資料が駆使されている。

大阪大學中國文學研究室編『成化本『白兔記』の研究』の取り上げる成化本『白兔記』とは、明代の墳墓から發掘された、南戲最古の版本である。本書の前半にその重要性和意義が論述され、後半には、成化本『白兔記』の翻字と校勘と譯注、および押韻分析が記されている。「作品を元來の姿に戻し、作者たちの實像を追い求める」という研究の本筋が本書ではみごとに展開されている、同時に本書のリーダーである高橋文治氏は、それが一つまちがえば「成化本のもつタイムカプセルとしての價値を捨象する」危険をはらんでいることにも十分に自覺的であり、「あとがき」にはその苦惱が綴られていて、共感を呼ぶ。

同じく細かな譯注と校勘の仕事に、小川陽一『明代の遊郭事情 風月機關』と、古田敬一主編『拍案驚奇譯注2 不倫夫婦の因果應報』がある。

前者の小川氏は、妓女や遊郭と關わる文學作品の産出とその變容に着目し、とくに明清の遊郭や妓女

の實情を知る手がかりとして、明末の日用類書に多く收載されている『風月機關』を選び出す。それゆえ本書は、氏が長年携わってきた日用類書研究の成果でもある。本書の前半が『風月機關』の譯注であり、後半には、東大東洋文化研究所蔵の底本の影印とその翻字が收められている。

後者は、三年前に上梓された『拍案驚奇譯注1 唐賽兒の亂始末記』の續編である。廣島大學所蔵尙友堂刊三十九卷本『初刻拍案驚奇』を底本として、その卷三十二に譯注を施している。同卷の「入話」「正話」に關する解説や參考資料も添えられている。譯注を擔當したのは、古田氏のほか、狩野充徳、久保卓哉、市瀬信子、船越達志、川島優子、角谷聰の諸氏である。

合山究『明清時代の女性と文學』は、これまで『幽夢影』、『紅樓夢』新論』等を上梓してきた氏の、明清文學研究の集大成ともいえる書である。氏は、宋元から明清への移行を、主知主義から主情主義への、文化の質的轉換ととらえ、明清時代のもっとも重要な文學的關心事は「女性」であったという認識のもと、「節婦烈女論」「薄命の佳人論」「巾幗鬚眉論」「男性詩人と女弟子」「戲曲小説における女性」と、この時代の文化に影響を與えたいくつかのタイプの女性群を考察してゆく。氏が研究を始めたころ、こうした文學に目を向ける人は稀であったが、「われわれ外國の學者は…中國學者の研究しないようなものをこそ眞先に研究し、紹介すべきではないか」「花であれ、美人であれ、その時代の人々が最も精

魂を傾けたものを研究して何が悪いか」と「開き直つて」読み進め、明清文學の寶庫に至りついた、という。

同じく明清を通じて扱ったのが、大木康『原文で楽しむ 明清文人の小品世界』である。明清文學といえ、白話小説や戯曲が思い浮かぶが、當時最も心血が注がれた文學ジャンルは、「實は依然として傳統的な詩と散文なので」あった。その中から「わが心の琴線に觸れた文章を拾い集め、いささかきままな解説を施した」という。唐寅作と稱されるいわゆる西廂八股を筆頭に、陳繼儒「文娛序」、馮夢龍「情仙曲」、衛泳「悅容編」、陳維崧「吳姬扣扣小傳」等が取り上げられ、譯注と解説が付されている。

八、近現代

この部では、魯迅關係の專著が三件公刊されている。北岡正子『魯迅 救亡の夢のゆくえ―惡魔詩人論から「狂人日記」まで―』は、二〇〇一年に上梓された同氏『魯迅 日本という異文化のなかで』に續く時期、すなわち魯迅の留學期の後半である一九〇六年から一九〇九年までを、対象とする。この間、魯迅が醫學と等價交換した〈文藝運動〉の實體を探ることをテーマとし、その中心をなす「摩羅詩力説」から處女作「狂人日記」に至るまでが考察される。加えて「摩羅詩力説」の「人」概念に大きな関わりをもつ嚴復「天演論」の詳細な検討や、惡魔派詩人ペーテーフイの研究が縁となった、北岡氏とガ

ラ・エンドレ博士との交友の記が收められている。

中井政喜『魯迅探索』は、北岡氏の取り上げた時期にほぼ續く、魯迅前半生の文學活動（一九二七年頃まで）と、革命文學論争（一九二八、二九年）を対象とする。魯迅文學の「暗さ」、その復讐觀、人道主義と無治的個人主義、その文學理論の展開からマルクス主義文藝理論の受容までが、考察されている。

代田智明『魯迅を読み解く―謎と不思議の小説10篇―』は、魯迅『呐喊』から3篇、『彷徨』から4篇、『故事新編』から3篇を選んで、テクスト分析を積み上げた書である。ただし、分析の位置づけに必要な前提や空隙を埋める傳記的事實を、全體の最初に「前奏曲」、また、中間に「間奏曲Ⅰ」「間奏曲Ⅱ」、最後に「後奏曲」として、配してある。テクストの謎と不思議を読み解いていくと、書き手の身の生涯がかかえた矛盾や存在様式につきあたってしまう、という「廣義のテクスト主義者」である著者が、施した工夫である。

樽本照雄『漢譯ホームズ論集』は、清朝末期から中華民國にかけて、コナン・ドイル作シャーロック・ホームズ物語が、中國でどのように受容されたかを明らかにしている。清末民初に發表されたホームズ物語の漢譯はおびただしい數にのぼるが、阿英『晚清小説史』以來、一九八〇年代以前までの中國文學研究は、そのことを無視し續けてきた。本書はまずその實情を示し、そのゆえんを考察する。ついで、上記の漢譯を原作英文と比較対照することで、翻譯

状況を克明に追跡する。「結論を急がない」著者は、「概説では抜けてしまう部分をすくい上げる」ことを企圖し、「研究は現在も進行中である」と本書を結ぶ。

城谷武男著・角田篤信編『沈從文「蕭蕭」「阿金」「牛」の版本研究』は、二〇〇二年の『沈從文全集』刊行をきっかけに、「蕭蕭」「阿金」「牛」の三作を対象として、『沈從文全集』に至るまでの諸版本を、比較し校勘したものである。「蕭蕭」については、初出雜誌以來、作者と編集者によってなされてきた改作の様相を追究している。續く「阿金」では、版本系統の分析に焦點が絞られ、沈從文自身の校改の原則とはまったく異なる版本の存在が見出される。「牛」においても、「阿金」におけるのと同様の問題點が指摘されている。

藤井省三編『東アジアの文學・言語空間』は、「岩波講座「帝國」日本の學知」の第五卷として發刊されている。標題の「東アジア」とは、日本語圏・中國語圏・韓國朝鮮語圏を指す。二〇世紀の前半は、日本語と北京語という二大國語圏の時代であったが、二〇世紀の後半には、韓國語・廣東語・臺灣語・マレー語などの新興言語圏が成長する。同時に日本語文化圏でも、在日日本語作家や中國人留學生の作品、東アジアへの滞在経験に基づく日本人作家の作品等が現れる。他方中華人民共和國では、文化大革命の呪縛からの解放や、歐米に亡命した高行健・鄭義らの活躍により、北京語文學の質的空間的な擴大がなされる。加えて、それらの地域での相互交流

がいよいよ盛んになってきているという。こうした二〇世紀「東アジア」における文學・言語空間形成の過程が、八本の論文によって描き出されてゆく。それらを通して探られているのは、國民文學を越える廣域文學の可能性である。

尾崎文昭『規範』からの離脱―中國同時代作家たちの探索―も、「アジア理解講座」という講座シリーズの第五巻である。一九九〇年代以後の中國文學の各方面について、日本語の翻譯で讀むことのできる作家と作品が優先的に選ばれ、一〇名の研究者によって紹介と分析が施されている。この時期の中國經濟の躍進やそれに伴う都市景觀の變貌は、日本のマスメディアにも盛んに報道されているが、文學と文化に關する報道は多いとはいえない。しかし、ある社會を理解しようとするとき、そこに暮らす人びとの心を反映し表現し、かつ社會のあり方を問う文學を見ずして、十全な理解が可能であるのか。本書はこうした問題意識のもとに、現代中國の文學狀況を三部に分けて考察し、この時期の文學現象の基本的な姿と流れを浮き彫りにしていく。

右の『規範』からの離脱』にほぼ重なる時代を對象とするのが、宇野木洋『克服・拮抗・模索―文革後中國の文學理論領域―』である。本書も、全體を3部に分かつ。第1編は、文學理論領域における「脱文學」への歩みを、「プレモダン」現象の根深さとその克服という角度から記述する。第2編は、八〇年代前半から顯著になってきた歐米理論の受容をめぐめる問題群を、「モダン」現象との拮抗と多元化

という角度から記述する。第3編は、九〇年代中期から二一世紀初頭における文學理論領域が、現實社會と切り結ぼうと試みてきた思考の結果を、「ポストモダン」現象への戸惑いと模索という角度から、記述している。

さてここで、前掲の『東アジアの文學・言語空間』を想起すれば、そこには臺灣文學がかなりの紙幅で論及されていた。昨年の「學界展望(文學)」にも、「臺灣文學研究の隆盛」と題された項目があった。二〇〇六年も、臺灣文學の翻譯や紹介は少なくない。「新しい臺灣の文學」シリーズでは、朱天文「荒人日記」が池上貞子氏によって、白先勇「孽子」が陳正靚氏によって、翻譯されている。「臺灣現代詩人」シリーズでは、痲弦詩が松浦恆雄氏に、林亨泰詩と陳千武詩が三木直大氏によって、譯出されている。さらに「九、民間文學・習俗」に入る書ではあるが、「臺灣原住民文學選」では、紙村徹氏が神話・傳説・昔話を紹介し、孫大川氏が「原住民文化・文學言説集1」を發刊している。

右に挙げた叢書群に先駆けて、八〇年代から九〇年代には「臺灣現代小説選」シリーズが發刊されていた。その譯者の一人であった松永正義氏が、『臺灣文學のおもしろさ』を上梓している。氏の二〇〇四年までの論文を収めたものである。近年の臺灣をめぐめる情況、および文學全般をめぐめる情況の變化を前に、戸惑いを率直に綴る「あとがき」も印象的である。

むすびに代えて

十二分類はまだ終わっていない。だが、紙幅および、擔當者に残された時間と能力と體力が盡きかけている。まだまだ重要な著作は多い。ことに、「九、民間文學・習俗」「十、日本漢文學」「十一、比較文學」「十二、書誌」の各部に觸れることができないのは何とも心苦しいが、紹介については、以上でひとまずの締めとすることを、お許しねがいたい。

さて、以上の紹介を書いてきて、氣付いたことが、二點ある。それらを記して、結びに代えたい。

第一は、單行本のなかに、以前に發行された書の續編、あるいは完結編に位置づけられる書が多いことである。これは、著者の研究の繼續性を物語っている。一口に繼續性というが、それは容易なことではない。年齢とそれに伴う信用が増すにつれ、人は、勤務先でも地域社會でも、委囑される仕事が増える。加えて昨今の、いやが應にも驅り立てられる合衆國型競争社會への移行の中で、不本意にも果たさなければならぬ仕事が増えてくる。断れば、より立場の弱いあの人とあの人に迷惑が及ぶ、という周囲の狀況も、はっきりと見えてくる。身体はどうにガタがきている。研究時間は激減する。そうした中から時間を絞り出し、そこで一番生きている實感を持つことのできる營爲に、つかのま没頭する。續編や完結編を發刊されたがたは、そのようにして日々を繋いでこられたにちがいない。その聲告と、情熱と、着實でたゆみない歩みの尊さに、まずもつ

て、敬意を表したく思う。

第二には、現今における文學研究の危機について、さまざまな研究者が考えておられることである。單行本の「八、近現代」に挙げた城谷氏は、その著の「おわりに」に、「それにしても日本では、沈從文などはもとより文學をやる若い人が中國畑では激減しているようだ」と記し、同じく尾崎氏は、編著の「あとがき」に、「中國でも、日本と同様に文學があまり振るわないと見える狀況が最近ではたしかにある」という。しかし尾崎氏は同時に、「その意味では、文學が振るわないというのは、東アジア近代の國民國家建設期に普及した、大衆の「啓蒙」を任務とした特定の文學概念が、大量消費・情報化社會下で人びとへの吸引力を失っているということであって、形を變えた文學の力は依然として變わずに必要とされていると信ずる」と記す。尾崎氏のいう「國民國家建設期」のみならず、それ以前や以後にも存在した、「啓蒙」的な、その意味ではある種特權的な「特定の文學概念」は、たしかにもはや「吸引力を失っている」。そうした狀況下で氣がかりなのは、この分野を専攻するむしろ若い人々のあいだに、じつは幻にすぎない特權性や特殊性を既定の事實と誤認して、瑣末な専門性や因襲的な約束事に過度に囚われる傾向がありはしないだろうか、ということである。私たちが日常ふだんの、小説や映畫や美術や音楽や語らいや風景に素朴に動かされる心情と地續きのものを、中國文學にも感ずることがなければ、その研究の存續は危ういかもしれない。中國

文學の中の「文學の力」を、どう見出していけるか。月を指す指に滯らずに、月それ自體の輝きを見てもらうにはどうしたらよいか。文學研究に携わる者に、課題として提起されているように思う。

最後に、一應の目安として、二〇〇六年に發刊された著書と論文の數を、分類別にグラフにした。高い稜線が論文、低い稜線が著書である。論文でひときわ高い峰をなすが、例年同様、⑧近、現代で、一四二件にのぼる。それに、④隋唐五代の一〇四件と、やや引き離されて③漢魏晉南北朝の五八件が續く。著書でも、⑧近、現代が、三四件と多いが、それに續くのは、①總記と、⑥金・元・明の二〇數件である。論文數が多かった③と④は、一〇件と一件であった。
(佐竹保子)

